

人類学博物館紀要 第 34 号
(ISSN 0388-8711)

南山大学人類学博物館紀要

第 34 号

南山大学人類学博物館

2016

巻頭言

人類学博物館がリニューアルして、2015年で2年以上が経った。開館当初は「ユニバーサル・ミュージアム」「触る展示」「全面ハンズオン」などと取り沙汰されていたが、そろそろ落ち着いてきた感じがする。とはいえ、まだ人類学博物館を視察したい、一度見に行きたいという博物館関係者もあり、その都度、是非見に来てくださいとご案内している。話題として取り上げられるのはうれしいことである。

2015年の11月には国立民族学博物館で「ユニバーサル・ミュージアム論の新展開—展示・教育から観光・まちづくりまで—」と題した公開シンポジウムが開催され、100名を超える参加者の前で、人類学博物館の取組みを紹介する機会を得た。大学博物館は広報力に難があると言われるが、こうした場で知名度を上げていくことは必要なことであるし、また様々な人と出会い、様々な活動実践を知り、様々な意見を交換し合えるということは大変楽しい経験となる。

しかし、開館して2年を過ぎてもなお、「触る展示でユニバーサル・ミュージアムにしました」と言っているだけではほとんど何もしていないのに等しい。人類学博物館が本当の意味でのユニバーサル・ミュージアムを目指すためには、そろそろ新たなステップを踏み出さなければならない頃であろう。

その一つの方向性として、今後、聴覚障害者（聾者）に対するアプローチを考えてみたい。実は、先に紹介した民博のシンポジウムで、視覚障害者である広瀬浩二郎氏と聴覚障害者である相良啓子氏による対談が行われた。こうした対談は、おそらくは世界初の試みではないだろうか？その場に居た者として、人間の表現力・コミュニケーション能力の可能性に深く感動させられたのである。そして、このことが今後の博物館の方向性に大きな示唆を与えてくれたことは間違いない。

だが、聴覚障害の人たちとの交流は、視覚障害の人たちとは別な次元の難しさがあるという。また、視覚障害者の時もそうであったが、今回もまた、われわれは素人なのである。

聴覚障害の人たちに対して博物館側からなにがしかのものを提示できるようになるためには、最低でも1～2年程度の時間がかかるであろう。しかし、時間がかかったとしてもなお、その実践を試みることで、博物館それ自体も変革していく契機が生まれるにちがいない。

これからの大きな方針として準備していきたい。

2016年3月
南山大学人類学博物館

目 次

巻頭言

ミクロネシアの草刈り用手鋏

..... 如法寺慶大… 1

渦巻文の型式学——バンチェン土器を事例として——

..... 黒澤 浩… 12

展示されている安行2式土器

..... 大塚達朗… 23

土偶に描かれた線刻画——愛知県西尾市清水遺跡の事例から——

..... 植木雅博… 34

ミクロネシアの草刈り用手鋏

如法寺慶大

1. はじめに

本稿は、南山大学人類学博物館に収蔵されているミクロネシアのサンゴ島で使用される草刈り用手鋏について紹介するものである。現在、この資料は収蔵庫に保管されているが、記録台帳には「石斧」と記載され、収集年、収集地など詳細については不明な点が多い。筆者もこの資料を見かけた当初は、石斧であることをそれほど疑ってはいなかった。しかし、資料自体をよく観察してみると、刃に用いられている素材や、刃と柄の着装方法など、石斧との気になる相違点がいくつも生じてきたのである。

本稿は、こうした相違点に注目して、民族誌などの文献資料、モノの観察と比較調査を通して、この草刈り用手鋏について検討する。モノは人間のあらゆる行為と関連し、その行為のなかで形成されていく。それならばモノを通して人間の意図や行為も読み取れるはずである。本稿ではこうした立場に立ち、モノを通してその背景にある人間の動きにも着目していくものとする。これは手鋏という博物館資料をより知ることにつながると思う。

2. 南山大学人類学博物館所蔵の手鋏

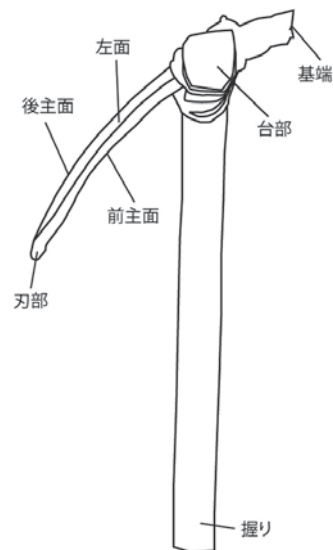
本章では当該資料である手鋏について、その観察所見を示していく。それにあたり、まずは便宜的に資料の各部分名称を定義し、その後資料の観察所見を述べていく。

2-1. 資料の各部分名称について

資料の観察所見を記述していく上で難しいのが資料の各部分名称の呼び名である。説明時に混乱を避けるためにも統一された名称を用いるのが適当であると思われるが、当該資料の手鋏には、そのように統一された名称を記載した資料が管見の限りでは見つけること

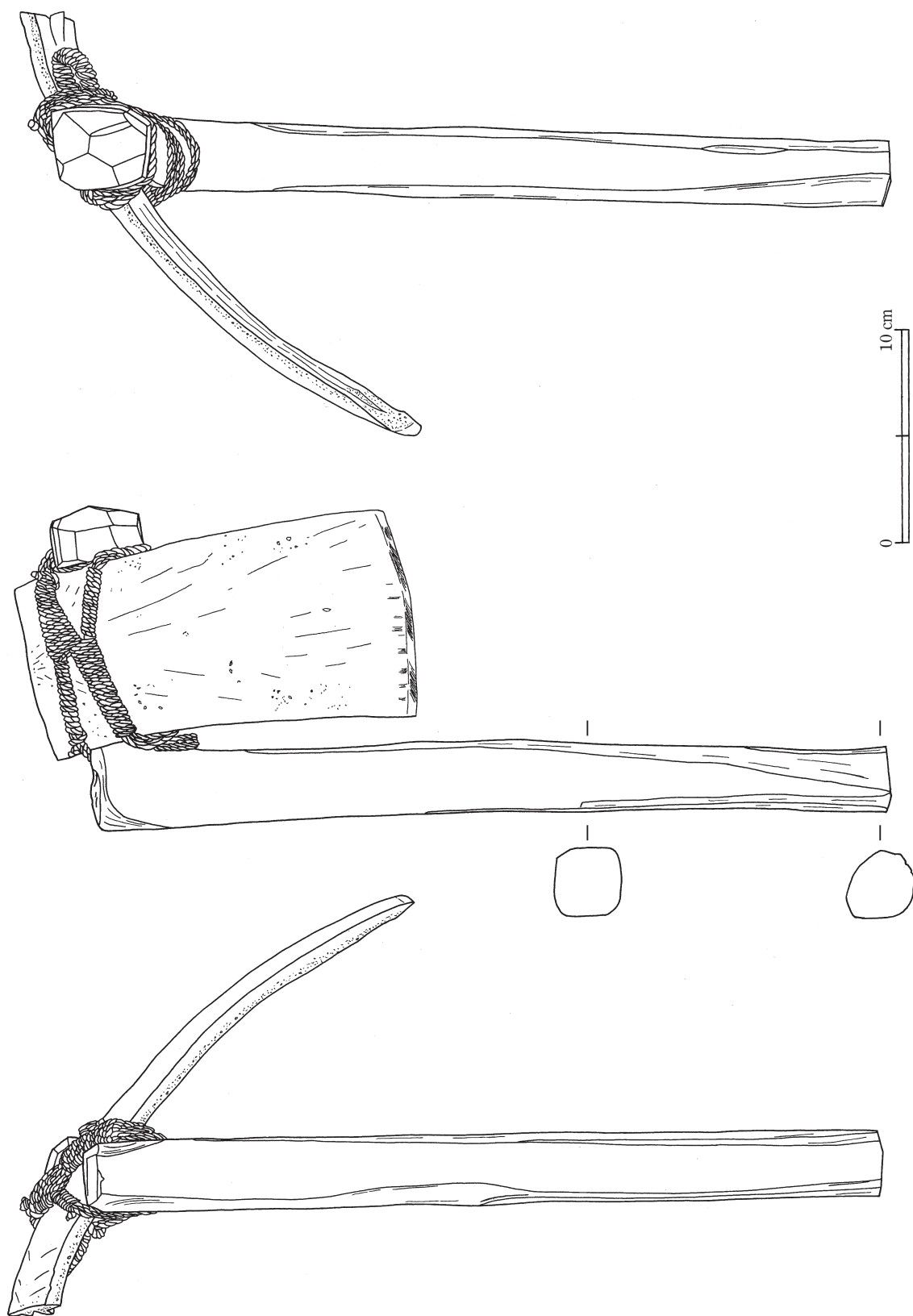
ができていないのが現状である。そこで、本稿では、便宜的に部分名称を統一するために、佐原真による斧の研究を参照するものとする（佐原 1977、1994）。モノの形状についての説明は後述にゆずるが、横斧と手鋏は刃と柄の着装状態など類似した箇所も多く、両者を比較する上でも統一された名称を用いるのは適当と考えるからである。

手鋏は刃が柄に着装されており、この刃と柄の各部分名称を以下に挙げていく。この名称は、第1図にもまとめているので参照していただきたい（第1図）。まずは、刃に関する名称から述べていく。刃は先端部の切る部分を「刃部」、その逆側の端を「基端」、そして基端を含む柄に着装する部分は「基部」とよぶことにする。刃には表と裏があり、それぞれに「主面」があると考えることができ、使用者が鋏を手にもっている状態から、使用者から見て手前のほうを「前」、遠いほうを「後」、右の面を「右」、左の面を「左」とよび分けることにする。すると、刃の各面の名称は「前



第1図 各部分名称

(図は筆者作成)



第2図 手鋏実測図

(南山大学人類学博物館所蔵・筆者作成)

主面]、「後主面]、「右面]、「左面]となる。次に、柄に関係する名称について述べていく。刃と柄が装着されている側を「頭部」、両者が直接装着されている部分を「台部」、そして、使用者が柄を握る部分を「握り」とよぶことにする。

便宜的とはいえ、このような部分名称はモノを説明する上で重要なものであり、本稿においても有効であると考えられる。

2-2. 観察所見

ここからは当該資料である手鋏について、その観察所見を述べていく。第2図の実測図と写真1を合わせて参照していただきたい



写真1 刃の前主面側

(筆者撮影)

まずは、刃について述べていく。刃は、横幅が広く後主面側に凸状に、前主面側が凹状に湾曲した形状をしており、その厚さは5mmほどになる。その全長は湾曲の形を考慮に入れると28cmとなる。横幅をみると刃部は10cm、基部に向かって中央が9cm、基端が8cmと徐々に狭くなっている。刃部には両面ともに研磨された痕跡がみられ、非対称的に前主面側のほうに勾配が強くつけられていることから、この刃は「前主面片刃」といえる。刃部には研磨痕がみられるが、刃部以外の面は前主面・後主面ともにそれほど研磨された痕跡はみられない。このことから刃の全体に対する研磨は行われていないと思われる。刃の素材に注目すると、オセアニアにおいて斧に用いられる石や貝とは違う特徴がみられる。例えば、刃の側面に層状かつ一定の範囲内に微細な穴が連続してあいていること、またそのような微細な穴は刃全体にもみられること、前主面側の刃の中心部に基端まで伸びる筋がみられること、などである。こうした特徴から、貝や石とは違う素材の可能性も考えられる。

柄は一端が屈曲しており、斧を装着する台部と握りがみられる。これらは一木で作られていることから、柄は木の枝分かれの部分を利用して作ったものと考えられる。柄の全長は36.5cmあり、頭部側の幅が4.0cm、握りの幅が3.0cmとなり、握りに向かって徐々に細く角がとれるように加工されている。おそらくこの加工は使用者の握りやすさを考えて加工された痕跡と思われる。握りには、他の箇所と比べると木面が黒く変色している様子がみられる。屈曲した台部の長さは11.5cmあり、刃をはめ込み装着させるための凹形の加工が施されている。

これら刃と柄はお互いに直交する形で装着されている。特徴的なのは、台部の長さであり、台部が屈曲側に11.5cmの長さがあることで、その形状が横に広がりを見せていることがわかる。両者を結合するのに用いられているのは、ヤシの繊維製の紐である。この紐を何重にも巻いて固定している。外に表れている結びの形は、後主面側はX字の形に交差するように巻かれ、その巻かれた紐を束ねてぐるぐるとコイルのように巻き上げている。前主面側は、後主面側から斜めにタスキをかけるように巻かれており、後主面側のような巻き上げ工程はみられない(写真1)。この前主面側には紐によって輪状のつくりがみられる。おそらく保管時にひっかけるためのつくりと考えられる。

以上、博物館所蔵の手鋏について観察所見を述べてきたが、そのなかでも手鋏に関していくつか気になる点が出てくる。例えば、刃の素材である。石や貝とは違うようだが、その素材は何を用いているのか。また、刃と柄の装着方法において横斧との類似がみられるが、その具体的な方法には違う特徴がみられる。こうした点は、ミクロネシアにみる手鋏の特徴となるのだろうか。この点について、本稿では考えていきたい。

ここまで博物館所蔵の手鋏について、その観察所見を述べてきたが、その特徴を知るにはその他の記録もみる必要がある。次章では、過去に記録された手鋏についてみていきたいと思う。

3. 民族誌に残された記録

過去の民族誌のなかでは、ミクロネシアの手鋏に関していくつか紹介がなされている。それらは主にかつて日本がミクロネシアの島々を委任統治領としていた時代に残されたものである。

まず、紹介するのは松岡静雄によって書き残された

『ミクロネシア民族誌』の記録である。松岡は、手鋏と判断できる道具を南洋貿易会社ボナベ支店長から寄贈されたシャコガイ製斧の一種と紹介している（第3図）（松岡 1927：679）。また、同著の農具に関する記録でも類似した形状の道具を記載しており、ここでは亀の甲羅で作られた刃について言及している（第4図）（松岡 1927：735）。



第3図 シャコガイ製斧
（松岡 1927：679）

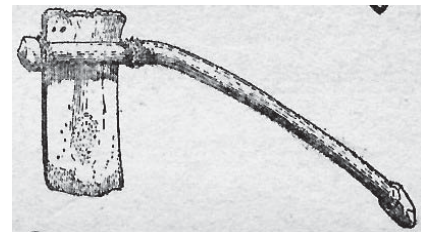
第4図 亀の甲羅製農具
（松岡 1927：735）

この二つの図についていくつか所見を述べておきたい。まず、第3図には、幅広い刃とそれに合わせた台部が装着され、前主面側には紐によって作られた輪がみられる。柄は刃と比較すると片手で扱えるほどの長さと思われる。次に、第4図をみていきたい。こちらも幅広い刃が装着され、先の斧と似たような柄の形状をし、前主面側に紐による輪のようなつくりも観察できる。これら両者の図を比較してみると、刃や柄の形状などの部分が類似しており、おそらく同種類の道具について取り扱ったものと思われる。

ここまで記録をみてくると、この民族誌のなかではスケッチによる形状の記録とともに、刃の材料や機能性についても記述していることがわかる。しかし、同一の道具とも捉えられる道具を工具と農具でかき分けるなど、道具自体について、その他の道具との分類などは明確になされていなかったのではないかと、と思われる。

次に、挙げるのは南洋委任統治領時代にミクロネシアの島々の民具調査を行った染木の記録である。染木は、この手鋏について、パラオの陳列館にて目撃したとし、トラックの亀骨製立斧という名称とともに、次のような証言を残している。「……中略……海亀の背骨を以て作った斧形の物がある。此の標本は新製品で

果たしてかかる斧が実際に有ったか如何か疑わしいが、若し有った物とすれば他島には見ない希な様式のものである。」（染木 1945：221）



第5図 亀骨製立斧
（染木 1945：221）

この証言からは、染木が当該資料を海亀の背骨を用いた斧の一種であり、その形状は他島には類のない珍しいものと考えていたことがわかる。図を見ると、湾曲した幅広い刃が台部に装着された道具であることがわかる。また、博物館資料にみられるような微細な穴が刃の前主面側にみられる。

染木のスケッチはこの道具の形状を捉え、刃と柄の形状を前主面側から確認することができるものとなっている。刃の素材については、ウミガメの背骨としている。スケッチと合わせて考えると、これらの微細な穴はウミガメの骨にみられる特徴と考えることができるだろう。機能面については特に言及されていないが、斧形という証言からも斧に近い工具の一種と考えていたのではないだろうか。

松岡と染木の記録はいずれも断片的ではありながらも、手鋏の形状や機能の特徴についていくつか注目すべき記述がみられる。まず、素材については両者ともにウミガメの甲羅及び骨を挙げている点にある。オセアニアの各地では石斧や貝斧が用いられているが、ミクロネシアにおいてはその多くの島々で貝斧が用いられている。そうした貝とは違う素材であるウミガメの利用について言及していることから、少なくとも1900年代前半時期ではウミガメの甲羅を刃として利用した道具が使用されていたと考えてよいと思われる。また、形状に関しては両者には少なからず一致した箇所もみられ、幅広く扁平な形の刃や、それを装着する柄の台部、片手で扱えるほどの柄の長さなど、スケッチ上にみる道具の形状には類似した特徴がみられる。両者ともに形状については斧形という言葉がなされていることから、形状としては斧の一種という認識があったものと考えられる。しかし、その機能面に関しては証言の違いがみられ、松岡は農具の一種、染木は工具の一種として言及していることから両者の認

識に違いがあるものと考えられる。

ここで少しまとめたい。両者の証言からは、ミクロネシアの手鋏について、形状や刃の材料については認識の一致がみられるが、その機能面に関しては農具と工具という多少の違いがみられた。松岡と染木の当時の観察過程については不明であるが、道具の転用をしていた可能性もあるため一概にどちらの証言が間違っているとはいえないであろう。少なくともこうした記録が残されていることから、委任統治領時代では日常的に使用されてきた道具であることは間違いないと思われる。

さて、ここまで民族誌の記録をみてきたが、これ以後、この道具については議論されておらず、詳細な資料紹介はほとんどなされていない。しかし、オセアニア先史学を専門とする印東は、その著書のなかで当該資料について簡単な紹介をしている。それによると、ミクロネシアの一部のサンゴ島で使用されたウミガメの甲羅で作った草刈り用手鋏としている（印東 2002：75）。ミクロネシアの根裁農耕ではサトイモ科のイモを栽培することが知られているが、ここではその栽培時に使用される道具であることが示唆されている。この根裁農耕では、土を耕すところから植え付け、収穫までの工程において、中心的に棍棒が使用されることが指摘されているが（中尾 1966：54）、印東は掘り棒以外の道具として草刈り用手鋏を挙げている（印東 2002：75-76）。印東によると、放置されることで短冊状に分解されたウミガメの甲羅の薄い板がまるごと利用され、その一端に刃をつけ柄に取り付けることで手鋏とされたようである（ibid.）。これらの言及は簡単にふれられたものであったが、手鋏という物質文化の記録として貴重な報告である。

ここまで3つの記録をみてくるなかで、手鋏について少しずつその姿があらわれてきた。機能面については、農具や草刈り用とする証言があることから斧のような工具ではなく農耕、特に印東が指摘するように除草に関係する道具である。

しかし、手鋏のモノとしての特徴など、その詳細な部分についてはいまだ不明な点が多い。例えば、刃の素材がウミガメの背骨としてもどの部分を加工しているのか、どのように刃と柄が着装されているのか、農具としてどのように扱うのか、など、モノとそれと関連する人間の行為について明らかにされていないのである。次章では、こうした疑問点について検討していく。

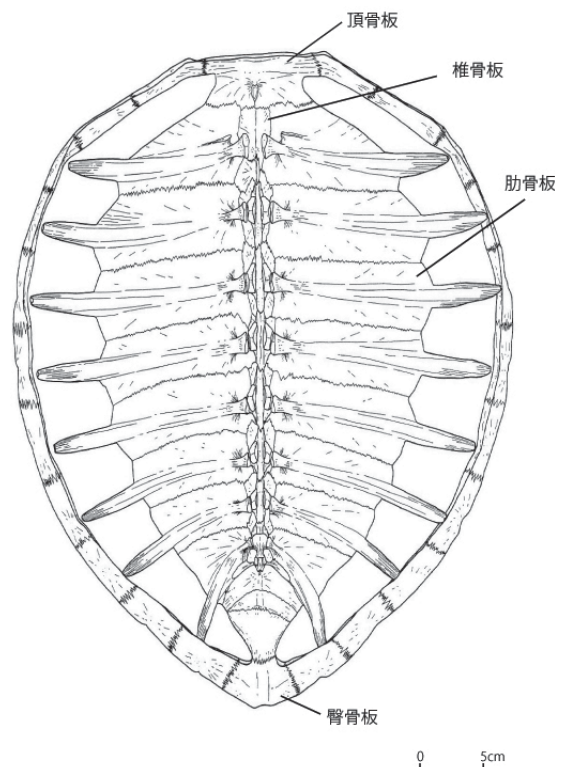
4. 資料の検討

文献資料から手鋏の概要について明らかにすることができた。この章では、さらに資料の観察と比較を通してモノとそれと関連する人間の動作について検討していく。

4-1. 刃の素材の検討

手鋏の刃には、主面や側面に確認できる無数の微細な穴や、前主面側の中心部に基端まで伸びる筋が確認できるなど、貝や石とは違う特徴を有している。先の研究者によってウミガメの甲羅や背骨という指摘がなされているが、ここではさらに具体的にみていきたい。

そもそもカメの体の構造、特に甲羅の構造とはどのようなになっているのだろうか。カメの構造のなかでも、甲羅は最もその特徴を示している部分であり、装甲や殻など身を護るための仕組みをもつ生物のなかでも、背骨や肋骨が甲羅に組み込まれて癒合している点において独特の構造をしている（平山 2007：11）。この甲羅は鱗板と甲板が重なりあうことで構成されている。この鱗板は甲羅の外側で表皮が強く発達したもののことを指し、この鱗板の下に発達しているのが骨か



第6図 アオウミガメ背甲内面

(西本 2005：121 の図を一部改変)

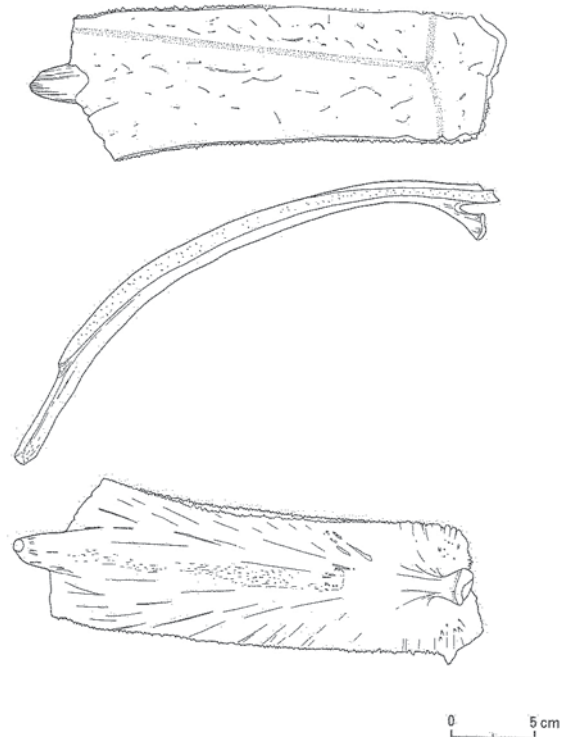
ら形成される板状の甲板のことである。この鱗板と甲板はそれぞれが細分化された多くのパーツから構成されており、お互いの接合部が重なり合わないよう配置されていることで甲羅の強度が保たれている。

このような構造の甲羅を手鋏の刃に利用したのである。その利用方法について第6図のアオウミガメの背面内面、第7図のアカウミガメの肋骨板の骨格図を参照しながら考えていきたい¹⁾。手鋏の刃と図の肋骨板を比較してみると、湾曲し扁平な形状をしている点、側面など各所に微細な穴が確認できる点、中心部に大きな筋と突起が確認できる点など、形状をはじめとして有する特徴も類似していることから、手鋏の刃はウミガメの背面にみる肋骨板であることは間違いなさであろう²⁾。一枚の肋骨板を用いて、その椎骨板側を刃の基端にし、甲羅の外周側を刃部として加工していたことがわかる。ただし、側面は細かく整形されるにとどまり、その横幅自体はほとんど変化していない。つまり、手鋏の刃にはウミガメの肋骨板がもつ形状がそのまま利用され、成形時にはその形を大きく変化させることはせず、細部を整えるような加工を施すにとどめているのである。そして、この刃に一致するように台部も作られたため、あのような屈曲した柄になるのである。肋骨板の横幅は、一度により広い面積の草を刈ることができ、しかも比較的軽いため手鋏の刃としては適当と考えられていたのではないだろうか。

4-2. 刃と柄の着装方法

ここでは、オセアニアの横斧との比較を通して手鋏の形状と着装方法の特徴を明らかにしていきたいと思う。比較にあたり、まずは横斧についてその概要を述べていく。

横斧 (adze) とは斧の一種であり、刃が柄に対して直交する形で装着されているものをいい、手斧ともよばれている³⁾ (佐原 2004 : 4)。オセアニアでは、その多くの地域において横斧が使用されている⁴⁾。特にメラネシアやポリネシアの島々では横斧が優勢な状況は続いてきたとされ、横斧は「万能な斧」として日常生活のなかで使用されてきた (佐原 1977 : 79)。例えば、道の障害物の除去や畑を整備するための木の伐採、建物用の丸太の整備、焚き木の調達、木工品の製作、カヌーの製作など、様々な場面で使用される (Blackwood 1964 : 23)。立木を伐採する際も第8図のように、伐採対象の前に立ち振り上げて下ろすことで可能となる (Townsend 1969 : 202)。斧の柄は、第9図にみるように一端が短く屈曲する形状をし、その部



第7図 アカウミガメ肋骨板

(西本 2005 : 123)

分に斧身が装着されている。これは枝分かれの木が利用されている。刃面の刃の様相について様々な事例があるが、民族事例でいうと「前主面片刃横斧」が圧倒的に多数を占めているという (佐原 1977 : 60)。刃と柄の着装状態は、刃の刃面のみが外に出るようにされており、基端側はソケットにすっぽりと覆われた状態でソケット自体が台部に籐などで固定されている。このソケットの役割は斧身の脱落を防ぐ、使用時の衝撃を和らげて柄の破損を防ぐほか、刃を回転させることも可能とする (Steensberg 1980 : 15)。



第8図 横斧による伐採

(Townsend 1969 : 202)

このような横斧と手鋏について、その刃と柄の着装方法に注目して比較を行っていききたい。両者ともに刃が柄に対して直交した形で着装されている点については共通している。しかし、その台部と着装方法に関しては大きな違いがみられる。先述したように、横斧では刃を着装する場合に、ソケットと呼ばれる部品に刃の基端側を入れ込みそれを柄の台部に固定する方法がとられることが多い。この方法により斧身の脱落の防止、加工時の衝撃を和らげるなどの効果が見込まれるわけだが、さらには、基端側を包み込むことで加工時に刃部にかかる衝撃を受け止める働きも考えられるのではないだろうか。木を加工するにあたり何度も刃部を打ち込むことになるので、蓄積されるその衝撃は大きいものになるはずである。そうしたときに、基端がしっかりとソケットなどで包み込まれていることで、基端側で衝撃を受け止め、刃自体がずれるといった事態も防ぐことができるのではないかと考える。作業の過程で刃がずれるような事態は、作業の遅延をまねきかねない。そうしたトラブルを回避する役割もあるのではないだろうか。つまり、刃部を用いた加工には基端側の支えが必ず必要なのである。

一方で、手鋏の着装方法は、台部に対してヤシの繊維製の紐で縛られたつくりをしているが、横斧にみられるソケットなどの部品がみられない。これは、横斧と比較した言い方をすれば、刃部が受ける衝撃を基端で受け止めるような構造がみられないということである。こうした場合、もし、木の伐採などの大きな衝撃があった際は、刃自体が横や後ろへとずれるなどの事態も起こりうるのではないだろうか。このように考えると、手鋏はその使用時において、刃部を用いた堅い物質の加工などの想定はされていないように思え



第9図 横斧

(Townsend 1969: 200)

る。また、紐の結びに注目すると、後主面側と前主面側で結びが違うことにも気がつく。後主面側は交差する形で巻かれ、さらには何重にも巻いた紐を束ねてコイルのように巻き上げる方法がとられているが、前主面側ではそうした巻き方はみられない。こうした違いは使用時に必要な耐久性を考慮しているのではないだろうか。つまり、後主面側の耐久性が上がるように「厚く」巻かれているのは、対象に接する面であるため丈夫にしておくこと、また、後主面側で使用時にかかる負担を支えるためであると考えられる。草を刈るというのはその根元を切るだけではなく、表面の土ごと浅く掘り返すように行われることもある (Steensberg 1980: 53)。この手鋏もそのように使用されると想定するならば、このような結びの形も不自然ではないだろう。

このように横斧と手鋏の着装方法をみてみると、両者は使用時の状況の想定から違っていることが考えられる。横斧は堅い物質への強い衝撃、一方で手鋏は、ある程度柔らかい物質への弱い衝撃が想定され、その負担を支える箇所も異なるのである。

4-3. 手鋏の使用に関する検討

ここまで手鋏の刃や着装状態が草や土を使用対象とするのに適した形であることを示してきた。ここでは、ミクロネシアの根栽農耕の概要を述べた後、その使用時における手鋏や人間の動作について検討を加えていきたい。

4-3-1. サンゴ島における根栽農耕の概要

ミクロネシアの広い範囲内には、様々な島が点在するが、大きく2種類に分けることができる。火山島とサンゴ島である。ここではサンゴ島について焦点をあてていくことにする⁵⁾。サンゴ島は海面下に沈降しなくなった珊瑚礁より形成された島である⁶⁾。サンゴ島は、火山島に比べると農耕をする環境としては厳しい環境にある。離水した珊瑚礁によって形成されるその土壌は珊瑚石灰岩によって覆われ、その主成分は炭酸カルシウムとなるため、土壌は栄養分が乏しくなる。また、環礁島は海拔が低いいため全体的に降雨量が少なく、もし日照りが続けば早魃にあうことも少なくない。また、降った雨も水はけのよい土中に吸収されるため真水が溜まりにくい。さらに、その海拔の低さから島全体が津波や高波の被害をうけることもあり、イモなどの栽培植物が海水に浸ってしまった場合は全滅することもある。

このような自然条件からサング島において栽培可能な植物は限定的なものとなる。その主要な作物は、タロイモやヤムイモなどの栄養繁殖をする根茎類や、ココヤシをはじめサゴヤシやパンノキのような樹木類となる。樹木類は、基本的に植え付けた後の手入れを必要としないため労力をそれほどかけることなく食料を得ることができるため重宝される。根茎類を中心とした植物の栽培は、生育に際して手入れが必要となり、島の環境によって栽培方法が異なる。これらの主だった栽培植物は、サトイモ科＝タロ [Colocasia esculenta]・スワンプタロ [Cyrtoispermum chamissonis]・クワズイモ [Alocasia macrorrhiza]、ヤマノイモ科＝ヤム [Dioscorea alata]・[D. esculenta]、ヒルガオ科＝サツマイモ [Ipomoea batatas]、バショウ科＝バナナ [Musa sapientum]、フェイ・バナナ [M. fehi]、クワ科＝パンノキ [Artocarpus altilis]、ヤシ科＝サゴヤシ [Metroxylon spp.]、ココヤシ [Cocos nucifera]、タコノキ科＝パンダヌス (カルガ) [Pandanus julianetti] などである (大塚 1995: 44 の表より抜粋)。

このサトイモ科は、いずれの種類も太平洋全域に見られるが、栽培種としての重要度は島ごとに異なっており、例えばクワズイモは西ポリネシアの火山島、スワンプタロは主にミクロネシアとポリネシアのサング島で主要作物となっている (菊沢 2003: 54)。このスワンプタロは比較的耐塩性があり、土中であれば長期保存が可能なることからサング島では広く栽培されてきた。真水や土壌に乏しいサング島の環境に適応した栽培方法が行われており、それがピット栽培と呼ばれる方法である。これは、人工的に作った沼状の掘削穴のなかで作物を栽培することを指す (Barrau 1961: 68)。その一般的な方法は、まず島の内陸部にて淡水の地下水層⁷⁾に達するまで穴を掘る。次に、穴の底土のなかに枯れ木など堆肥となる有機物を堆積させ、そこに種イモを埋め込み、その真水を利用して生育するのである。この方法は、個別の穴にイモを一個植える場合と、広い範囲でまとめて植える場合がある (印東 2002: 152)。

バロウズによると、中央カロリン諸島にあるイファルク島でもタロ栽培は行われており、主にスワンプタロが栽培されていた (Burrows and Spird 1957: 52)。この島ではタロの栽培は主に女性の仕事とされていたが、植え付けの際に雑草を取り除く作業などは、かなりの負担となる作業であったため、男性も参加していたようである。植え付け後は、畑の除草を行うなどの手入れ作業が必要になり、刈られた雑草はタロ栽培の

肥料となるように活用されている。

当該地域において行われる栽培のなかでも除草から土を耕し、掘削、植え付けといくつかの工程がみられる。こうした栽培で用いられる道具が掘り棒である。この掘り棒とは、長さが成人の背丈ほどある木の棒であり、これによって土を耕し、掘り、植え付けから収穫までを行われる。掘り棒を一旦持ち上げた棒の落下する力を利用して土に先端部を差し込むため、堅く重い木が材質として選ばれている。また、その形状も先端が尖っているものが多いが、島によってはヘラ状に削ったものや、足で踏むための台が作られているものがある。掘り棒は、その名称が原オーストロネシア語の語意にまでさかのぼることから、アジアからオセアニアへやってきたモンゴロイド集団によってもちこまれたものと考えられている (印東 2002: 75)。この掘り棒以外にも除草用の道具としていくつか挙げられている。印東は先述したように手鋤を挙げており (印東 2002: 75)、ニューギニア高地にて伝統的な農耕具の調査を行ったスターンズバーグは、パドルの形をした鋤や竹製のナイフなどを挙げている (Stensberg 1980: 53)。スターンズバーグによると、除草は土を耕す前に行われるものであり、短い草などは表面の土ごと除草することもある (ibid.)。

4-3-2. 手鋤使用時における動作



写真 2 柄を握る様子

(筆者撮影)

当該資料の手鋤がこうした除草の場面で使用される道具であることは、先の研究者が述べる通りである。ここでは、さらに資料を通して、モノとそれに関連す

る人間の動作について考えていく。

まずは、手鋏を使用する際の姿勢について考えていく。斧では、一般に柄の大きさと斧身の大きさ重さは関連し、柄の長短は用途や使い方に左右されることも多いといわれる（佐原 1977：42）。つまり、斧身が重く主に両手用ならば柄も長く、軽い斧身で主に片手用ならば柄も短くなるのである。では、手鋏をみていくと、柄は36.5cmと短く、刃もウミガメの骨製で軽くなっているため、主に片手用の道具であることがわかる。また、その柄の短さから地面に対して行う除草の作業は常に屈む、もしくは腰を曲げた状態で行うものと考えられる。

次に、手鋏を使用する動作、つまり作業時の手の運動について考えていく。主に片手用となる手鋏であるが、使用に際して右手、左手と決まっているのだろうか。筆者が資料を観察する際には握りを持つことがあり、その様子を上から撮影した様子が写真2である（写真2）。それを見てもわかるように刃が体の正面にくるように握れば、自ずと右手で持つことになる。除草作業時において、一般的にも刃が正面にあるほうが作業が行いやすいと考えられることから、一概に右利き用とまではいえなくとも、少なくとも手鋏は右手で扱うほうが適していると思われる。

それでは右手で操作することを想定し、その使用時の手の動きについて考えていきたい。横斧の場合は、その運動は主面を見ると直線的、側面を見ると円弧を描くように運動するとされる（佐原 1977：60）。類似した形状をもつ手鋏も基本的にはこの動きに近くなるが、そこには手鋏なりの動きがあると考えられる。このように想定する理由として、刃と柄の着装における角度の違いが挙げられる。横斧の刃部をみると、台部に固定された刃が90度に近い位置で向きが決められている（図⑨）。こうすることで刃は対象に対して真っ直ぐに打ち込みことが可能になる。それに対して手鋏は、刃が柄に対して約50度で固定され、横斧と比べるとより鋭角となる。しかもウミガメの肋骨の湾曲がそのまま利用されていることから、刃部の向きが柄の握りに向かっていることがわかる。つまり、横斧と手鋏では刃の角度と刃部の向きが違っているのである。この点から、手鋏の使用時における手の動きは、横斧とは違うことが想定できるのではないだろうか。手鋏の刃部を、対象に横斧のように振り下ろして打ち込むには手首が不自然な角度になるため打ち込みにくい。刃部が当たるようにするには、腕を振り下ろすというよりも腕を後ろに引きつつ円運動をするよう

な動きが必要になるのである。草刈りという場面で、屈む、もしくは腰を曲げた状態においては、こうした腕の動きによって手鋏の働きが発揮されるものと考えられる。

4-4. 小活

ここまで手鋏について刃の素材、刃と柄の着装方法、使用場面に着目して検討を重ねてきた。そこから、手鋏とはウミガメの肋骨の形を利用し、浅く地表を掘ることも想定した草刈り用の農具であることがわかる。この刃と柄の着装方法は、横斧のように直交して固定されるという点では共通するが、基端に対する支えや紐による固定方法、刃の角度と刃部の向きなどの相違点がみられる。こうした違いは手鋏を扱う人間の動作にも関連しており、これらの特徴をみていくと草刈り用手鋏とそれを扱う人間の姿が少しずつみえてきたのではないだろうか。

5. おわりに

本稿では、博物館所蔵のミクロネシアの草刈り用手鋏について、素材や着装方法、使用場面に着目し、資料の観察・比較検討を通して、草刈り用手鋏というモノとそれを扱う人間の動作について明らかにしてきた。資料を見つけた当初は石斧と思い込むこともあったが、調査を通して刃と柄の着装方法に共通点がある以上に、両者が違う機能をもつ道具であり、それぞれに特徴を有していることがわかった。今回は、限定的な資料比較となったため調査としては不十分と思われるが、モノからその特徴やそれを扱う人間の動作について検討をすることで資料への理解を深めることができたと考えている。モノと人間が不可分に結びついていることから博物館資料というモノを通じた研究は、さらに可能性が広がるのではないだろうか。

註

- 1) ここで参照しているアカウミガメ、アオウミガメの骨格図は動物骨格を分類する手引きとして『動物考古学』に掲載された西本豊弘氏作成によるものである（西本 2005）。
- 2) ただし、今回の資料調査では、アカウミガメやアオウミガメなどといったウミガメの種類を特定するには至らなかった。
- 3) オセアニアで使用される斧には、その他にも刃の

線が柄とほぼ平行する「縦斧 (axe)」がある (佐原 2002 : 4)。縦斧は金太郎がもつ鉞のような形態をしているが、本稿において中心となるのは横斧になるためここでは紹介にとどめておく。

- 4) 例えば、パプアニューギニアのヘブ族やククク族は横斧のみを用いているが (Townsend 1969, Blackwood 1964)、オーストラリアのイル＝イオロント族は縦斧を用いていた (佐原 1994) とされる。このように地域によって、縦斧と横斧の優劣関係は異なってくる。
- 5) 火山島は火山の噴火によって形成された島であり、その中央部には高い山がそびえていることが多く、サンゴ島との比較から「高い山」と呼ばれる。一般に、火山島はサンゴ島に比べると降雨量が多く土壌も豊かであることから根裁農耕に適した島といえる。
- 6) このサンゴ島には、環礁島と隆起サンゴ島という 2 種類がある。環礁島は、裾礁と呼ばれる火山島周辺を珊瑚礁が取り囲んだ状態から、中央部の火山島が沈降・水没し周辺の珊瑚礁が環礁として発達した状態のことを指す。この環礁全体の大きさは火山島の大きさに左右され、沈降した後の中央部にはラグーンが広がる。もう一つの隆起サンゴ島とは、一度海面に沈んだ火山島が再び隆起することで形成された島のことを指す。ナウルやテニアン島がこの種の島にあたり、ナウルのように海鳥の糞の堆積から形成された燐鉱石が堆積していることも多い。
- 7) サンゴ島では、雨水が地表へ浸透することで淡水の地下水層が形成される。この層は地下の海水面の上に、凸レンズの断面状に形成されており、その中心部が最も厚く、海岸線に近づくにつれてしだいに薄くなり海水も混入する傾向にある (近森 1993 : 137)。

参考・引用文献

- 秋道智彌 1995 「基層文化をさぐる」、大塚柳太郎編『モンゴロイドの地球 2 南太平洋との出会い』、東京出版会、143-160 頁。
- Barrau, Jacques 1961 *Subsistence Agriculture in Polynesia and Micronesia*. Honolulu: Bernice P. Bishop Museum.
- Blackwood, Beatrice 1964 *The Technology of a Modern Stone Age People in New Guinea*. Occasional Papers on Technology, 3 Oxford: Oxford University Press.
- Burrows G. Edwin and Melford E. Spird (eds.) 1957 *An Atoll Culture: Ethnography of Ifaluk in the Central Carolines*. New Haven: Human Relations Area Files.
- 近森正 1993 「サンゴ礁の形成と人間居住」、大塚柳太郎・片山一道・印東道子編『オセアニア① 島嶼に生きる』、東京大学出版会、pp. 133-151。
- 平山廉 2007 『カメのきた道 甲羅に秘められた 2 億年の生命進化』、日本放送出版協会。
- 堀田満 2003 「根裁農耕で利用される「イモ型」植物」、吉田集而・堀田満・印東道子編『イモとヒト 人類の生存を支えた根裁農耕』、平凡社、pp. 9-31。
- 印東道子 1995 「ミクロネシアへの拡散」、大塚柳太郎編『モンゴロイドの地球 2 南太平洋との出会い』、東京出版会、111-123 頁。
- 2002 『オセアニア 暮らしの考古学』、朝日新聞社。
- 2003 「先史オセアニアにおける食用植物利用」、吉田集而・堀田満・印東道子編『イモとヒト 人類の生存を支えた根裁農耕』、平凡社、pp35-51。
- 菊澤律子 2003 「オセアニアのタロー名称にもとづく系譜の特定」、吉田集而・堀田満・印東道子編『イモとヒト 人類の生存を支えた根裁農耕』、平凡社、pp. 53-76。
- LeBar, M. Frank 1964 *The Material Culture of Truk*. New Haven: Yale University.
- 松岡静雄 1927 『ミクロネシア民族誌』、岡書院 (2001 クレス出版)。
- 中尾佐助 1966 『栽培植物と農耕の起源』、岩波書店。
- 西本豊弘 2005 「動物骨格図集 (3)」『動物考古学』第 22 号 : 91-125。
- 大塚柳太郎 1995 「オセアニアの自然」、大塚柳太郎編『モンゴロイドの地球 2 南太平洋との出会い』、東京出版会、23-46 頁。
- 佐原真 1977 「石斧論—横斧から縦斧へ—」『考古論集—慶祝松崎寿和先生六十三裁論文集』、45-86 頁。
- 1994 『斧の文化史』、東京大学出版会。
- 染木照 1945 『ミクロネシアの風土と民具』、彰考書院。
- Steensberg, Axel 1989 *New Guinea Gardens A Study of Husbandry with Parallels in Prehistoric Europe*. London, New York, Toronto, Sydney, San Francisco: Academic Press.
- Townsend, H. William 1969 Stone and Steel Tool Use in a New Guinea Society, *Ethnology*, Vol. VIII, pp199-205.

A Micronesian Mowing Hand-Hoe

NYOHOJI Keita

This paper introduces a hand-hoe for mowing used in a coral island of Micronesia which is owned by the Anthropological Museum of Nanzan University, in order to give further understanding of materials through observation and comparative studies of objects. This item is registered simply as a “stone axe”, and no detailed information is available from the original register. Although there are characteristics common to other stone axes, some points, such as the material for the edge or the fixing method of the edge and handle, are different. I focus on such differences and investigate the item through study of records such as ethnography, and also through observation and comparative study of objects. Here I first identify the raw material by comparison with the skeleton of sea turtle, then investigate the fixing method of the edge and handle by comparison with adze. Finally I examine the motion of person using the hand-hoe by focusing on the detail of the item itself.

渦巻文の型式学

——バンチェン土器を事例として——

黒澤 浩

はじめに

近年、「文化系統学」という方法論が提唱されている。これは生物学における進化の理論を文化研究に適用しようという動きであり、その目的は、「対象の系譜関係を明らかにすること」であるという（中尾2012）。2012年に刊行された『文化系統学への招待』という本は、そのような目的と方法論を紹介したものである（中尾・三中2012）。そこでは絵巻物や写本など、これまで系統論的な研究とは縁のなかったような対象が選ばれ、分析されており、興味深い成果を挙げている。

だが、そこで言っている文化系統学の目的や方法とは、考古学では型式学という形で体系化されてきたものにほかならない。考古学では様々な器物の年代研究にこの方法を使い、それが考古学の基盤であると言ってよいほどに多くの成果が蓄積されている。文化系統学と考古学とはきわめて親和性が高い、というよりも、こと物質文化に関しては考古学を抜きにして文化の系統を語ることはできないであろう。

本稿では、型式学的方法による系統論的アプローチの1つのケーススタディとして、タイのバンチェン土器における渦巻文を取り上げる。日本の考古学においては、縄文土器を中心とした文様の系統論的分析を得意分野の1つとしているが、それは文様自体がある程度の複雑さをもっているため、分析しやすいという利点があるからだろう。バンチェン土器の渦巻文も「適度な複雑さ」をもつ文様であり、そういう意味でこうした分析には格好の材料なのである。

本稿で扱う資料は、すでに報告されている南山大学人類学博物館所蔵の山口由子コレクション（西江・黒沢2014）と、上智大学西北タイ歴史・文化調査団によって収集されたバンチェン土器である。

1. 資料の概要

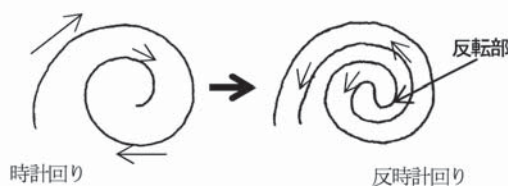
(1) 渦巻文の記載方法

資料の概要を説明する前に、記述上の都合から、本稿で用いる渦巻文の記載方法を紹介しておきたい。渦巻文はその構成が「適度に複雑」なために、そのまま説明しようとすると、煩雑でわかりにくくなってしまいうからである。

渦巻文は大きく2種類に分けられる（第1図）。一つは渦巻きの中心部で反転して折り返すものであり、これを「ロールケーキ型渦巻文」と呼ぶ。この渦巻文は二重の渦巻き線で構成されるが、反転しているため、その施文方向は反転の前後で逆方向になる（第2図）。



第1図 2種類の渦巻文
(右：ロールケーキ型、左：蚊取り線香型)



第2図 ロールケーキ型渦巻文の描き方

もう一つは反転しないタイプのものである。これを「蚊取り線香型渦巻文」とする。このタイプは反転していないので、渦巻き自体は1本線となる。

なお、両者には並列する渦巻文相互の連結の仕方に大きな違いが生じるが、これについては後述する。

また、見た目上、目立つ違いとしては赤彩の範囲がある。仮に文様以外の地の部分を赤彩して塗りつぶしているものを彩文A、塗りつぶしていないものを彩文



第3図 上智大学収集のバンチェン土器

Bとしておく。しかし、この違いは本質的な差異ではないであろう¹⁾。

(1) 上智大学西北タイ歴史・文化調査団収集のバンチェン土器 (第3図・第4図)

本資料は、上智大学の白鳥芳郎氏らが1967～74年にかけて、タイの北部山岳地帯でミエン族、モン族といった「少数民族」の調査を行なった際に収集された一群の民族誌資料とともに、本学に移管されたものである(重松2004、後藤2004)。ただし、この資料の収集に関する詳細はわからない。資料台帳には、バンチェン土器としてほかに3点ほど記載があるが、彩文土器は本資料1点のみである。資料番号はJC-0045と注記されている。

この土器は、底部が丸底の壺形土器である。高さ36.6cm、口縁部径25cm、胴部最大径36.9cmを測る。口縁部は外面に粘土帯を貼り付けていわゆる「二重口縁」としている。頸部はやや内傾気味のカーブを描いて広がり、ゆるやかに肩部に続く。肩部は稜をなして屈曲し、胴部を経て、丸底の底部に至っている。

本資料の製作技術については、口縁部にヨコナデの痕跡が見られるものの、全体的には白色の化粧土によるスリップとほぼ全面におよぶ彩文の施文によって観察することができない。内面についても、硬化した砂が付着しており、詳細は観察ができない。触察してみたところでも、タタキ技法で作られていれば生じるはずの内面の当て具痕も確認できていない。丸底の器形

を考えれば、タタキによる成形であった可能性は高いといえるが、あくまでも推測である。

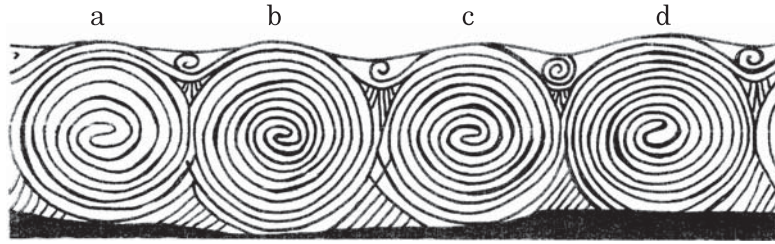
文様は全面に白色の化粧土によるスリップが施されており、その上に赤色顔料によって彩文が描かれている。文様帯は頸部と胴部にあり、口縁部および口縁部内面、そして底部は赤色に塗りつぶされている。

頸部文様は上下2帯の連続した波形状の三角形文で構成されている。上部の文様は直線文に上向きに三角形を突出させ、下部の文様は直線文に下向きに三角形を垂下させて、三角形が上下反対に向くように構成している。下部の三角形は胴部文様との間に描かれているため、胴部文様と下部文様の直線文が接近している部分では三角形が空間の幅に合わせて小さくなっている。

胴部文様はこの土器の主文様であり、本資料を最もよく特徴づける要素である(第4図)。主たるモチーフは渦巻文で、4つのロールケーキ型渦巻文を並列して配置している。今、仮にこの渦巻きに、左からa・b・c・dという記号をふって説明していこう。

先述のように、ロールケーキ型では渦巻きの中心部で彩線が折り返されて逆方向に描かれる線となっている。そのため、渦巻きは左から右へと連結させることが可能になる。a-b、b-c、c-dにはいずれも渦巻きを連結するS字状曲線が挿入されているが、その連結方向は渦巻きの方向に合っている。

だが、このS字状曲線は渦巻きの延長にあるのではなく、渦巻きの外側下部に1ないし2本の線を加え



第4図 文様展開模式図

て、その線によって連結しているのであり、隣り合う渦巻きが直接連結しているわけではない。

今、渦巻きの連結方法について観察すると、a-b、b-c、c-d 間にはS字状曲線が挿入されていることはすでに述べたが、d-a 間に限ってはS字状曲線がなく、渦巻きどうしが直接接している。このことから渦巻文の施文順序を推定すると、a→b→c→dの順に描かれ、最後のdが描かれたときにはすでに土器面にS字状曲線を挿入する空間的な余裕がなくなっていたため、直接渦巻きdと渦巻きaとを接しさせたものと思われる。

このことは渦巻文の上部境界をなす、ゆるく大振りな波形文と渦巻文との関係からもみてとれる。bとcでは渦巻きの一番外側の線（最外周線とする）がその頂部で波形文に接し、その末端が巻き込まれて小さな渦巻きを形成している。それに対し、c-d間の小渦巻文は境界となる波形から垂下している。これは渦巻文dを描いているときに最外周線をc側に延ばすスペースがなくなったためと考えられる。一方、aとbの間の小渦巻文は、境界をなす波形の下に付された渦巻文bの最外周線の延長線上に描かれている。bの最外周線はそのままaの方に戻っていき、d-a間の小渦巻文を描く線となって、最終的には境界の波形につながる。こうしたことから、本資料の渦巻文は、本来2つの渦巻きを一対で描くことになっていたものであろうことがわかる。aとbの関係がそれを強く示している。そして、a・bを描き、c・dを描こうとしたところで、空間の割り付けに若干の無理が生じたため、割り付け上の問題を解消しつつ、2個一対の渦巻文を2単位描くため、S字状曲線と最外周線による連結を省略したのであろう。非常に巧みな対処方法であると言える。

ところで、渦巻文を連結させていくと、接する部分の上下に三角形の余白が生じることになる。本資料では上部の余白には小渦巻文を配置していることはすでに述べたとおりである。三角形の余白は小渦巻だけでは埋めきれないので、小渦巻の下に短い斜線を充填し

ている。

一方、下部の余白には渦巻文の円周のカーブに合わせた曲線を充填しているのだが、線の重複を観察すると、主要な単位文である渦巻文の線のほうが充填している斜線の上に被っているように見える。これは通常考えられる施文順序とは逆である。おそらく、後世に線が上描きされているらしく、明らかに2度描きの痕跡も見ることができる。こうした後世の修復・改変はバンチェン土器にはしばしば見られるものであり、本資料も例外ではなかったということである。

底部は円形に塗りつぶされているが、渦巻きに接する円を輪郭としており、輪郭の線が明瞭に見える。ただし、正円を描くことよりも渦巻文に接することが優先されたらしく、底部の円形赤彩部分は土器の中心からややはずれた位置にある。もちろん、先に底部を塗りつぶしてから渦巻文を描いた可能性もあるが、その場合には当初から土器の中心を外していたことになる。

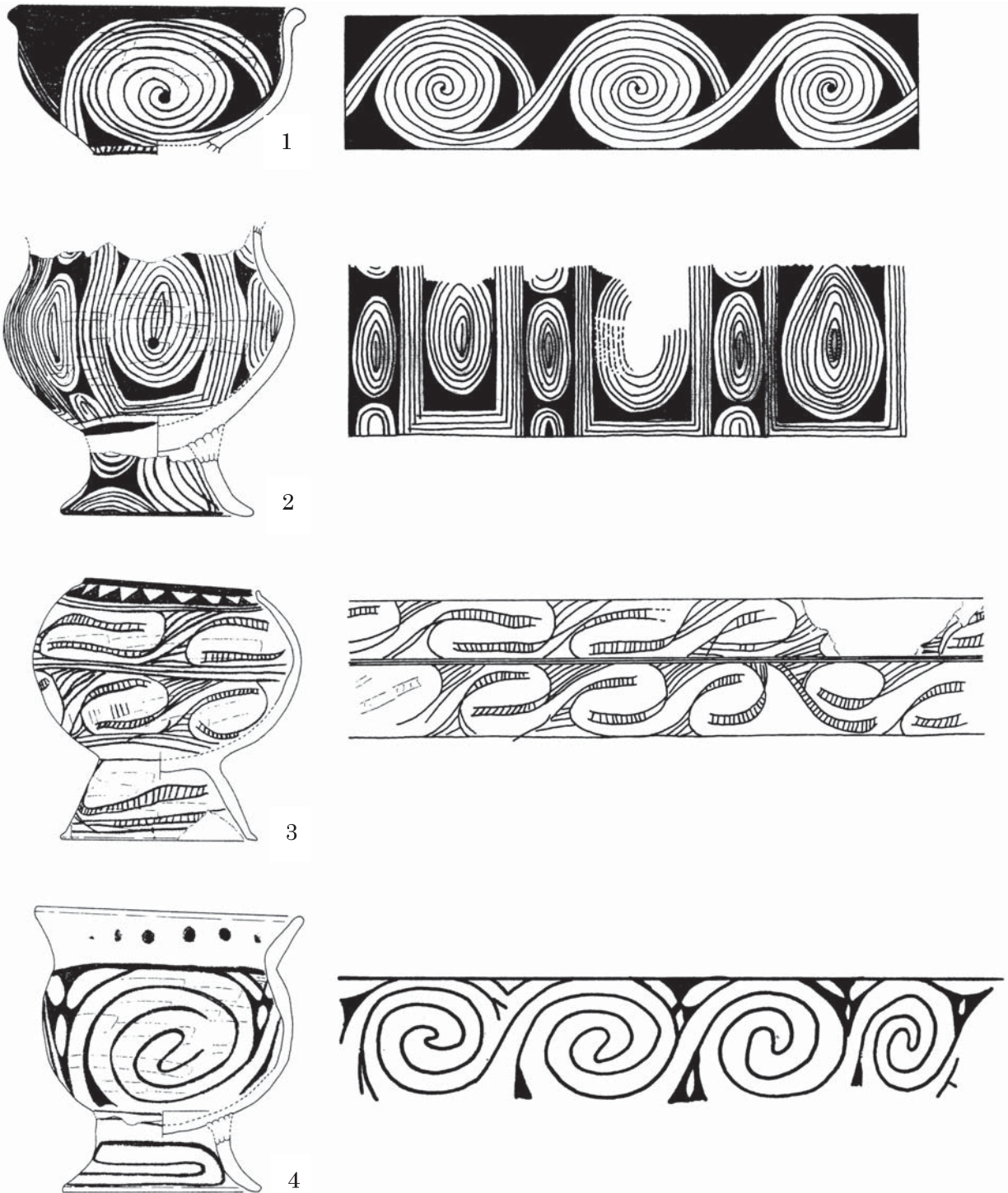
(2) 山口由子コレクションのバンチェン彩文土器 (第5図・第6図)

山口由子氏から寄贈されたバンチェン土器については、すでに本紀要の第32号で報告した(西江・黒沢2014)。

山口氏寄贈のコレクション(以下、山口コレクションとする)は、全部で15個体あり、黒色系土器3点、加彩黒色土器2点、有刻彩文土器4点、彩文土器6点である。今回はこの中から彩文土器のみ取り上げる。

彩文土器には、すでに報告してあるように、別個体を組み合わせて1個としているものもある。器形は口縁部が大きく外反する広口壺が多いが、中には鉢形あるいは無頸壺形のものもある。いずれも脚台を有しているか、あるいは本来は脚台を有していたものである。今回、分析対象とするのは、胴部文様に限られる。

第5図1・2は彩文Aの事例である。1は、ローラーキ型渦巻文で、折り返し点が円形に塗りつぶされ



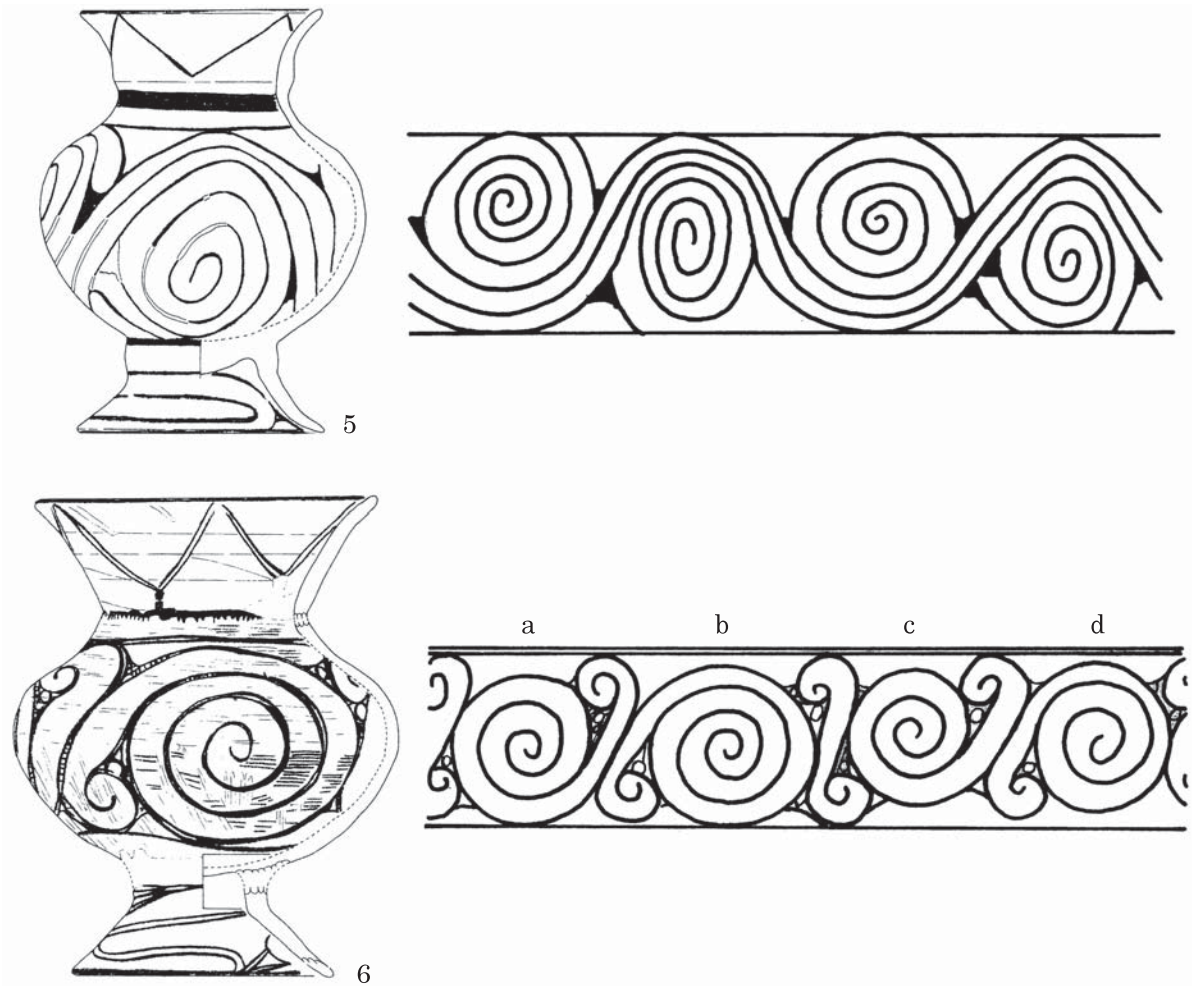
第5図 山口由子氏コレクションのパンチェン土器とその文様展開模式図 (1)

ている。渦巻文は3単位で連結する曲線は左側の渦巻きより伸びて、右側の渦巻きに至るが、右側の渦巻きには巻き込まれない。

2は、方形区画を3単位配置して、区画の内外に独立した同心の楕円文を6個配列している。

第5図3は入組文の事例であり、2本一組の線描き

で、2線間を短線でハシゴ状に充填している。文様は胴部に2段あるが、上下の文様帯の構成は同じである。上下を直線文で区画し、上の区画線から垂下した曲線が左に巻き込むように延び、下の区画線から出た曲線は右に巻き込むように延びて、上下互い違いに入り組む。曲線の元のほうは三角形の余白となり、その



第6図 山口由子氏コレクションのパンチェン土器とその文様展開模式図(2)

中を斜線で充填している。この斜線による充填とハシゴ状の短線とが地文的な効果を出しているため、斜線の施されていない部分が抜けて、入組文に見えるのである。

第5図4はロールケーキ型渦巻文を4単位配置している。各単位は、それぞれの右側の渦巻きの下辺から上方に延びる曲線によって連結されている。連結する曲線は隣接する渦巻きに取りこまれて巻き込んでいるので、連続的である。

第6図5は蚊取り線香型渦巻文の事例である。渦巻きは4単位配置されているが、それぞれは連結しておらず、器面全体をめぐる大振りな波形文²⁾の合間に渦巻きが配置された構図となっている。

第6図6はやはり4単位の蚊取り線香型渦巻文で構成されている。単線で描かれているように見えるが、実際には単線ではなく、複線で構成され、部分的に3で見たようなハシゴ状の短線充填の名残が見える。ここでは、仮に左からa・b・c・dとして説明しよう。

この渦巻文は単線表現ながら、渦巻きの末端が閉じているため、2本一組の曲線で枠線をなして右上方もしくは左下方に延びていることで、幅のある帯が渦を巻いているように見える。これらの渦巻きの連結部を見ると、a—bとc—dの連結部は左側のa・cでは渦巻きの最外周線が上方へ向かい、右側のb・dの渦巻きの最外周線は下方へと向かうが、それらが相互に背中合わせで接している。つまり、渦巻きどうしは直接は連結していないが、接する部分が渦巻きの方向と一致しているために、違和感なく連続的に見える。それぞれの末端は閉じて巻き込み、小渦巻を形成している。注目したいのはbとcの間に独立したS字状曲線が挟み込まれていることである。これは上智資料と同様に、本資料の渦巻文が本来は2個一対を1単位として描かれるものであったことを示している。独立したS字状曲線はその間に挿入されたものである。

以上の観察所見をまとめておこう。

山口コレクションのパンチェン土器の渦巻文には、

ロールケーキ型と蚊取り線香型の2種があり、それらには連結の仕方に違いがあるようだ。つまり、左側の渦巻きの延長が右側の渦巻きに巻き込まれることで連続化するもの、渦巻き2個が一對となるもの、そして大振りな波形文の間に独立した渦巻きを配置するものの3種が見出せるのである。

渦巻きの描き方と連結の仕方の相関で言えば、ロールケーキ型の渦巻きは連続化する。これは上智資料の説明でも述べたように、中心で折り返すことで逆方向の渦巻きが生じるためであり、これ以外の描き方では連続させることができない。

また、6に見られる複線構成は、痕跡的に残るハシゴ状の充填短線が3の入組文と共通することから、両者の近縁性を想定させる。

2. バンチェン土器の渦巻文

上述したように、人類学博物館所蔵のバンチェン土器は、渦巻文によって系統化することが可能であるように見える。しかしながら、わずか7点の資料をもって説得力ある系統を提示することは難しい。そこで、他のバンチェン土器の資料を加えながら、さらに検討してみたい。

だが、バンチェン土器を実見しながらの分析は困難であるため、ここでは1977年に刊行された『バンチェン陶大観』（太田・量 1977）掲載の土器写真に基づいて分析をすすめたい。もとより、こうした方法に限界があることは承知しているが、本稿の目的がもつばら渦巻文の分析に限られていることから、ある程度は有効性のあるものと判断している。

(1) 渦巻文の連結による類型化（第7図）

バンチェン土器の渦巻文の分析をするにあたり、渦巻文は連結の仕方によって類別が可能であるという見通しのもと、次の5つに類型化しておく。

1つめの類型は、渦巻文の最外周線の延長が隣接す



第7図 渦巻文連結方式の諸類型

る渦巻きに巻き込まれて連続するものであり、これを連結線巻き込み型とする。2つ目の類型は、渦巻文の最外周線が隣接する渦巻きに巻き込まれることなく、別な線を付加することによって連続的に見える効果を出すものである。連結線接続型としよう。

3つ目の類型は、渦巻文の最外周にさらに1帯の曲線が加えられ、渦巻き本体ではなく、その付加された曲線によって渦巻文が連結されるものである。これを最外周線付加型とする。

4つ目は器面全体をめぐる大振りな波形文の間に、独立した渦巻文を配置するものである。波形間並列型とする。

5つ目は渦巻文が連結・接続することなく配置されたもので、分離独立型である。

以上のような分類にしたがって、渦巻文を分析していきたい。

(2) 『バンチェン陶大観』の彩文土器に見られる渦巻文

バンチェン土器については量博満氏（量 1977）や今村啓爾氏（今村 2000）によって変遷の大要が示されており、前稿でも量氏にしたがってバンチェン土器の変遷を黒色土器→加彩黒色土器→有刻彩文土器→彩文土器として記述した。また、前稿では黒色土器の文様がいわゆる「サフィン—カラナイ類型」に後続するものである可能性を指摘し、そこに見られる入組文と彩文土器の渦巻文との系譜関係を想定した。本稿でもそれを踏まえて分析にはいきたい。

①入組文から渦巻文へ

黒色土器に見られる文様は、沈線による入組文を基本として、そのバリエーションが展開している（第8図）。おそらくは黒色土器9や7³⁾のようなS字状の曲線の末端が噛み合うようなモチーフを祖形として黒色土器15や16のような入組文が出来上がるのであろう。この入組文が連続化して水平方向に展開すると波形文となる。この波形文は彩文で表現される（第16図）。また、波形文が幅狭の文様帯の中で帯状化すると大洞A式風の工字文化する（第16図）。

入組文自体は様々なバリエーションを生みながらも基本形は彩文土器に採用される。彩文土器50・51は幅狭の文様帯の中で帯状化した入組文の例である（第9図）。入組文の上下が噛み合う部分が多重化することで渦巻文が成立するとみなすならば、その初期的な例は連結線巻き込み型となる彩文土器87のようなも

のであろう（第9図）。ただし、渦巻文のタイプが蚊取り線香型である点には若干の疑問が残る。

彩文土器 78 ではロールケーキ型渦巻文が成立し、右側の渦巻文との連結も密な事例といえる（第9図）。これ以後、渦巻文はさらに多重化し巨大化していくが、その要因の一つとして、それだけの文様が施文可能な器形の成立を考えておく必要があるだろう。

②渦巻文の複雑化

第10図の彩文土器 139 はロールケーキ型渦巻文が連結線巻き込み型で緊密に連結している事例である。中央の渦巻きの上部の最外周線が右側の渦巻きの最外周線につながり、右側の渦巻きの下部の最外周線が中央の渦巻きの下部最外周線につながることで、中央の渦巻きの曲線が右側の渦巻きに連続するような視覚効果を生み出している。しかし、彩文土器 138 では2個の渦巻きの連結は確認できるが、その両側の渦巻きとは連結しておらず、渦巻文2個一対で1単位の構成をとるようになる（第11図）。

彩文土器 85 や 144 は、線の多さから複雑に見えるが、基本は蚊取り線香型渦巻文が2個一対で1単位となっている事例であろう（第12図）。

さらに第11図 142 では連結線接続型となり、隣接する渦巻文の分離が進みつつある。

③渦巻文の分離・独立化

こうした連結方法の変化とともに生じるのが渦巻文の多重化傾向の加速化である。そして、結果的に渦巻文の多重化・巨大化が渦巻文相互の分離・独立化を促していく。

その一つの系統が渦巻文本体とは別に、S字状曲線による最外周線が二つの渦巻文間に挿入され、あたかも二つの渦巻きを連結しているかのように見せる第13図 96・100 や上智資料のような最外周線付加型の事例である。これらの渦巻文の連結部は渦巻き本体に巻き込まれていない。

さらに別な系統もある。それは大振りな波形文の間に独立した渦巻文を配置した波形間並列型の渦巻文である（第14図）。

彩文土器 91・92・93・108・118 や山口コレクション 5 等が該当する。彩文土器 108 は、線が多く、複雑に見えるが、波形文の中に渦巻文が配置され、波形文から伸びた連結線が渦巻きの一部に取りこまれているなど、過渡的な状況を示している。

最終的には渦巻文が相互に完全に分離し、独立する

ものが現れる。第15図 75 がそれに当たる。また、第15図 140 は分離、独立化途上の過渡的な文様である。

(3) 人類学博物館所蔵のバンチェン土器の位置付け

以上のような推定される渦巻文の系統の中に、人類学博物館所蔵のバンチェン土器はどのように位置づけられるのであろうか。

上智大学資料に関しては、最外周線付加型渦巻文の一種として理解できよう。

山口コレクションについては、分類上異なるカテゴリーのものや、系統の違うものを含んでいることになる。1 はロールケーキ型渦巻文の連結線巻き込み型としてよいが、2 は分離独立型である。いずれも彩文 A であるが、1 と 2 に関してはこの分類は意味をなさない。

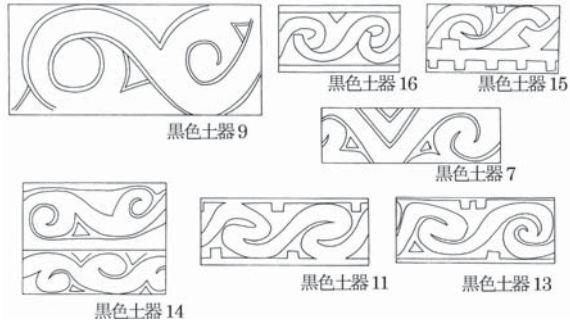
3 は入組文の系統であり、山口コレクションの中では黒色土器の入組文に最も近縁なタイプと言える。4 はロールケーキ型渦巻文の連結線巻き込み型の典型的な事例である。

5 は蚊取り線香型渦巻文の波形間並列型、6 は同じく蚊取り線香型渦巻文が2個一対で1単位となる構成のバリエーションとしてよいであろう。

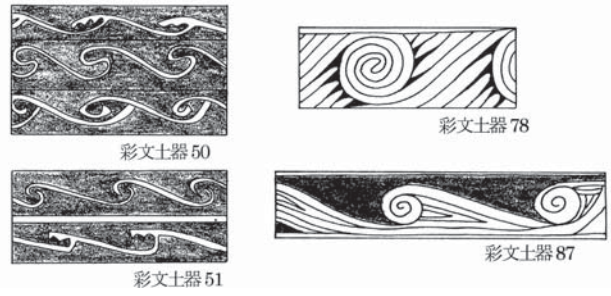
(4) ロールケーキ型と蚊取り線香型

バンチェン土器における渦巻文の系統をまとめると第16図の様にたどることができよう。興味深いのは渦巻文の分離が進行する過程で、ロールケーキ型から蚊取り線香型が分岐しているらしいことである。すでに述べたように、渦巻文を連結して連続させていこうとするならば中心で反転するロールケーキ型を採らなければならない。蚊取り線香型の場合では連結させてもせいぜい二つまでであり、2個一対で1単位となる渦巻文の成立の要因もそのへんにあるのかもしれない。

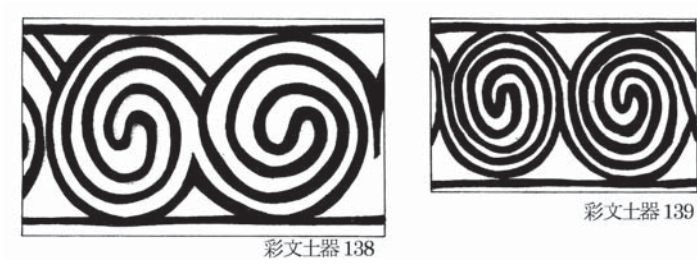
そして、もはや渦巻文を連結し、連続させることがないのであれば（あるいは連結し、連続させられなくなったのかもしれないが）、蚊取り線香型の渦巻文で十分にロールケーキ型と同じような効果を狙えたのであろう。彩文土器 91・92・93 は蚊取り線香型渦巻文だが、その中心では輪を描いている。これがロールケーキ型の反転部の名残であるとするれば、蚊取り線香型がロールケーキ型より分岐したことを示す証拠となるだろう。



第 8 図 黒色土器の入組文とそのバリエーション



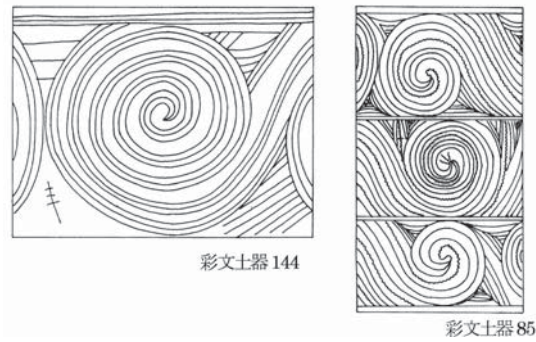
第 9 図 彩文化した入組文と初期的な渦卷文



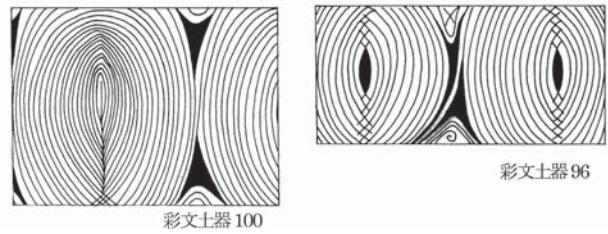
第 10 図 連結線巻き込み型渦卷文



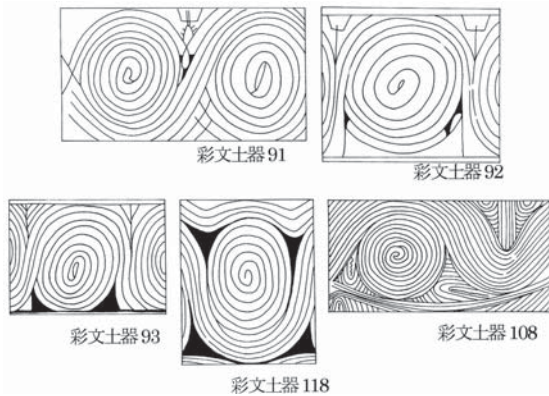
第 11 図 連結線接続型渦卷文



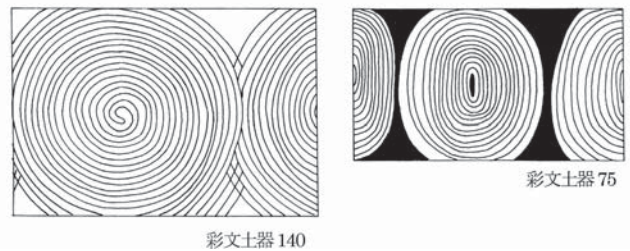
第 12 図 煩雑化した渦卷文



第 13 図 最外周線付加型渦卷文

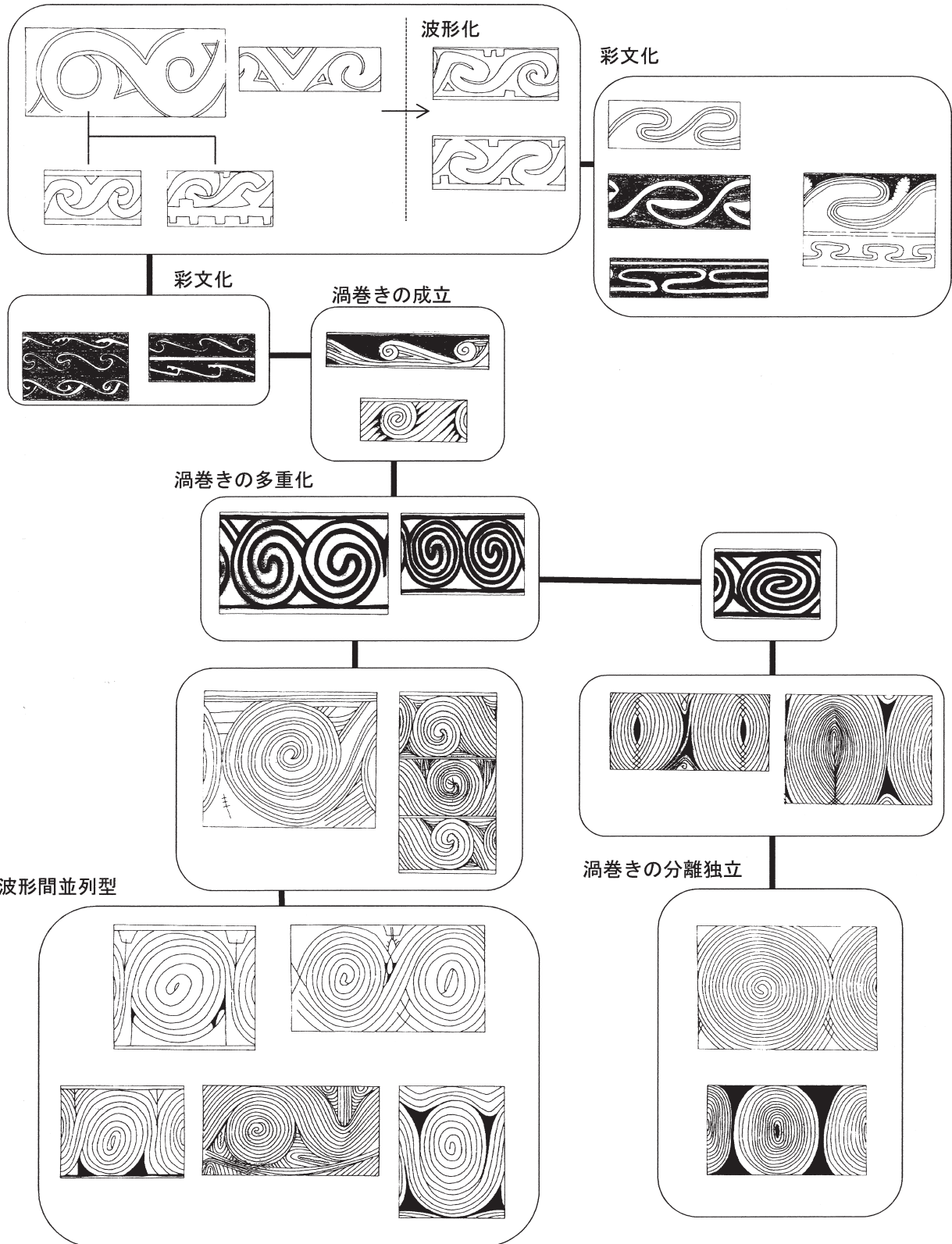


第 14 図 波形間並列型渦卷文



第 15 図 分離独立型渦卷文

黒色土器の入組文



第16図 渦巻文の系統

おわりに

本稿ではバンチェン土器の渦巻文を題材として、型式学的な分析を行なった。もちろん、この系統が確実なわけではないし、編年になっているわけでもない。仮に本稿で推定した渦巻文の系統が正しいとしても、遺跡・遺構での一括性等が確認できない限り安易に年代差に置き換えるべきではない。今回示したのは、あくまでも渦巻文の推定される系統にすぎないのである。

註

- 1) バンチェン土器は基本的には土器面全体を文様で埋め尽くす土器である。したがって、文様間の隙間を塗りつぶしていなくとも、原則としてその部分には何らかの文様が挿入される。つまり赤く塗りつぶしているか、いないかではなく、隙間をどのように埋めるかの違いにすぎない。ただし、後で紹介するような狭い文様帯に入組文を施文し、入組文部分を白抜きで描出する方法はあるため、一応この2分法を採っておくことにする。
- 2) 日本の考古学では「波状文」という用語が一般的であるが、バンチェン土器の場合、波形の振幅が大きいことと、区画文とされていることから、「波状文」とは区別して波形文と称しておく。
- 3) 土器の番号は『バンチェン陶大観』のものである。『バンチェン陶大観』では「黒陶」「彩陶」の用語が使われているが、本稿では「黒色土器」「彩文土器」に変更している。

参考文献

- 今村啓爾 2001 「東南アジアの先史美術」『世界美術大全集 東洋編 12 東南アジア』小学館
- 太田豊人・量博満 1977 『バンチェン陶大観』雄山閣
- 中尾央・三中信宏 2012 『文化系統学への招待 文化の進化パターンを探る』勁草書房
- 中尾央 2012 「はじめに——分野を越境する方法論」『文化系統学への招待 文化の進化パターンを探る』勁草書房
- 西江清高・黒沢浩 2014 「新たに寄贈されたバンチェン土器——山口由子氏コレクション」『南山大学人類学博物館紀要』第32号 南山大学人類学博物館
- 量博満 1977 「バンチェン文化」『バンチェン陶大観』雄山閣

Typology of Spiral Pattern

—A Case of Ban Chiang Pottery—

KUROSAWA Hiroshi

This paper tries to presume the historical relationship among spiral patterns represented on Ban Chiang pottery from Thailand by typological analysis. Two types of spiral patterns are known; one is the “Swiss roll” type, which reverses its direction at the core, and the other is the “mosquito coil” type, ending at the core without reverse. The major difference between those two types is in the way of interlocking of two horizontally situated spirals. The former can be extended continuously; an extension line of a spiral can be interlocked to another line of approximate spiral. The latter, on the other hand, can only make two types of simple motifs: a single spiral and a pair of two spirals. Analysing from such a point of view, we found that the spiral patterns can be divided into five types in terms of the way of interlocking: (1) spirals with convolved interlocking line(s), (2) spirals with connecting interlocking line(s), (3) spirals with additional outer line(s), (4) mutually situated intercorrugation spirals, and, (5) independent spiral(s). We also found that it is possible to trace the pedigree of spiral patterns; as a whole, it is supposed that the type (1) – firmly connected spirals – would be the starting point and then other patterns were gradually derived from it. Since the analysis here only shows the pedigree of spiral patterns, further information such as the situation of excavation is necessary for chronological study of Ban Chiang pottery.

展示されている安行2式土器

大塚 達朗

(1)

リニューアル・オープンとなった南山大学人類学博物館には、関東地方の縄紋土器が多数展示されている。しかも人類学博物館の方針で、入館者は展示資料を自由に触ってかまわないのである。筆者は、人類学博物館の縄紋土器資料を人文学部人類文化学科での演習・講義や大学院人間文化研究科人類学専攻での演習・講義で活用している。まずは、縄紋土器に慣れ親しんでもらうことを主眼としている訳であるが、最終的には、縄紋土器や縄紋文化は名ばかりの存在に過ぎないことを、実物資料を踏まえて考えてもらうためである。

今日、日本考古学という枠組は、大きな矛盾をかかえていると筆者は考える。たとえば、同僚の黒沢浩は、遠賀川式土器は「東漸」というイデオロギーの産物に過ぎないと厳しく指摘する（黒沢2011a：77-79）¹⁾。それに対して、筆者は全く賛成である。そのように、日本考古学を見直せば、今や、さまざまな問題点を指摘できるであろう。

小論では、筆者が縄紋土器や縄紋文化を見直す作業として、どのようなことを具体的に実践しているか、そのことの一部に触れてみたい。とくに、展示されている、千葉県市川市所在の堀之内貝塚から出土した安行2式大波状口縁深鉢形土器（堀越・領塚（編）1992：157〈第9図-3〉）（写真1・2）を講義・演習や研究でどのように有効利用しているか、そのことを述べたい。

(2)

筆者が批判してやまない、縄紋土器や縄紋文化について、肝心なことなのできちんと概観しておく。

今日の縄紋土器研究は、年代差があっても地方があっても結局は截然と分かち得ない一体の土器である

ことを強調した、山内の1930年代の研究に由来するものである。山内にとって縄紋土器とは、縄紋土器一系統説の謂であり、渡来土器から始まり日本列島各地で間隙ないしは空白のないまま連続と変遷した土器群が縄紋土器であって、変遷の間に列島外からの影響は不明というものであった（「縄紋土器は結局我々が想定して居るように一系統の土器だと認められるであろう」〔山内1932a：40〕/「この年代によっても地方によっても截然と分かち得ない一体の土器が縄紋土器なのであろう」〔山内1932a：41〕/「縄紋土器文化は、対外関係が不明である一方、内部に種々の発達変遷を持って居る」〔山内1932b：86〕）。以下に紹介する今村啓爾の発言からは、

縄文土器にはそれぞれの地域差があるが、全体として連続的な流れを形成し、列島外の土器からの影響はあったとしても大きなものではなかったと考えられている。（今村2004：36）

正に、山内の縄紋土器観＝縄紋土器一系統説が継承されて来ていることがよくわかる²⁾。

そして、日本列島内で一系統の変遷を説く山内は、あわせて、「土器製作は最も古い時代に大陸から伝来したであろう」（山内1932b：86）という前提に立つことから、最古の縄紋土器追求が喫緊事であること（「縄紋土器の由来を知るには、先ず最も古い縄紋土器を決定することが必要である」〔山内1932b：86〕）を強調した。他方、「強いて縄紋式の底が見えたとは云い切れないのである」（山内1932b：89）という実状も開陳した。縄紋土器一系統説にとって最大の弱点は、祖型となる土器が大陸からみつからないことであつた。祖型となる土器が大陸からみつからない限り、縄紋土器＝縄紋土器一系統説は仮説にすぎないはずで、山内にとって、最古の縄紋土器を通じて原郷土をみつけることが、最重要課題であつた。残念ながら、2016年の今も、縄紋土器の源郷土はみつかっていない。筆者からみれば、源郷土がみつかっていない

のであるから、縄紋土器一系統説は証明されていないままであるといわざるを得ないのである。

そのように見込みにすぎないかもしれない縄紋土器一系統説を前提に、また、旧石器時代の文化は存在しないとみなして、山内は、1930年代に、縄紋文化を「第一は大陸との交渉が著明でなく、農業の痕跡のない期間」（山内 1932b：85）と認識した。詳しくみれば、縄紋文化は、日本列島における最初の先史土器文化（「第一」の「日本遠古之文化」）で、荷担者は高級狩猟民³⁾と考えた訳である。

さらに、山内は、「縄紋式文化」⇒「弥生式文化」⇒「古墳時代」を強調して（山内 1935b、1939）、「凡そ利器或は歴史の有無を以て文化を分類するのは、人を分けるに身長又は財産を持ってすると同じく、甚だ表面的な取扱である。本人を姓名又は渾名で称ぶように、縄紋式文化と云う名称を使用するのが適切であろう」（山内 1935b：82）と述べた。その意味するところは、欧州先史考古学の三時代区分法にたいする批判であったと筆者は考える。欧州先史考古学の三時代区分が利器の変化によって漸進的変化をいいあらわした“あらい目盛り”でしかなく、他方、土器の新陳代謝を前提に導き出された細別および大別が漸進的変化をいいあらわした“正確で細かい目盛り”となるためである（大塚 2015b：3-4）。“正確で細かい目盛り”を有する「縄紋式文化」⇒「弥生式文化」⇒「古墳時代」の方が欧州先史考古学の三時代区分法より時代区分法として有効であろう。進化主義考古学ないしは社会進化論考古学における実践として、欧州先史考古学の三時代区分法を相対化するために、「縄紋式文化」⇒「弥生式文化」⇒「古墳時代」を提示したとみるべきであろう⁴⁾。

論件先取りして新陳代謝に言及したが、新陳代謝こそが山内の進化主義考古学ないしは社会進化論考古学の“肝”である。新陳代謝は以下の土器と粘土の関係を述べる文脈の中で言及されたもので、

土器によって文化の変遷を調査するのは一つの方便である。縄紋式文化に於いて始から終りまで続いている遺物は少ない。土器、石鏃、石匕、磨石斧などが主要なものである。このうち土器が最もよく変化して居る。その上最も豊富に発見されて、資料が得易い。一体土器の製作は、石器の場合とは違って、与えられた原料を減じて行って作るのではない。粘土を引延し、積み上げたりして存分形の変化を作り得る。装飾を付けるにも石器等より遙かに容易であって、手法の変化にも富んで居

る。即ち変遷し易い素質がある。一方土器は壊れ易いから、常に新に作られ、補充される。従って新陳代謝が盛である。これは年代の変遷に拍車をかける。壊れた土器は再利用されることが少い。廃物として借げなく捨てられる。おまけに朽ちることを知らぬ千古の邪魔物だ。これは考古学者に幸し、比較的時代の揃った土器を遺物層から得やすからしめる。また、原料即ち粘土は大概の処にあるから、手近に得られ、その土地で製作が出来る。これは地方色を生ずる一つの条件となるであろう。（山内 1935b：83）

以下のようにまとめられる。

- ①土器は、粘土を原料として存分形の変化を作り得るから、変遷しやすい素質がある。
- ②土器は、壊れやすく常に新たに作られ補充されるために新陳代謝が盛んで、年代の変遷に拍車をかける。
- ③粘土は大概のところであって入手しやすくその土地で土器は製作できるから、地方色が生まれる。
- ④土器は、惜しげなく捨てられ、かつ、腐らないから、比較的時代の揃ったものを遺物層から得やすい。

パラフレーズすれば、土器は、粘土から作られることから変遷しやすい素質がある上に、廃棄と補充がくり返されるという意味での新陳代謝が盛んで、年代の変遷に拍車がかかる。かつ、粘土は遍在することから地方色も生まれやすい。したがって、年代的・地方的単位（型式）となるものを得やすいから、土器は先史考古学の恰好の研究対象となる、という訳である。廃棄と補充がくり返されるという意味での新陳代謝は、細胞自体の入れ替わり生命維持に不可欠な平衡状態の仕組みの類比であるから、山内は、土器の変化を漸進的変化とみなしていたのである。

(3)

縄紋土器一系統説の中身は、年代差があっても地方があっても結局は截然と分かち得ない漸進的変化する一体の土器群である。つまり、縄紋土器では、一つの由来を共有した（とみなされた）各地の土器群において、ある地方ある段階の土器は必ずその地方のその前の段階の土器から系譜を引き、漸進的に「土器は土器から」となっているはずなのである。逆にいえば、「土器は土器から」となっていない土器出現の例証が可能であれば、それは縄紋土器一系統説への反証なの

である。

水ノ江和同(2015)は、九州早期後半に、突如壺型土器が手向山式に出現し、平柵式と塞ノ神式と続いて消えることに関して、東名遺跡から出土した編み籠が原型となる旨を説いた。水ノ江はよくわかっていないが、「土器は土器から」とならない事例を明らかにしたと評価するべきであろう。他の器物から土器の形や紋様の起源が説明できるのであれば、漸進的変化ではないことをいあてたことになるのである。水ノ江(2015)は、本当は、縄紋土器一系統説への反証の一つである。

筆者はこれまで縄紋土器一系統説に対してさまざまな反証をあげてきた。それは並行して存在する土器どうしの関係を分析して、器種間の要素のやり取りなどを抽出するものである(大塚2000)。前後する土器どうしの「土器は土器から」ではなく、並行する土器どうしの「土器は土器から」を明らかにして来たのであり、漸進的変化ではない土器どうしの横関係を明らかにしたのである。筆者は、それに関わるさまざまなことを演習や講義で話している。

安行1式土器や安行2式土器では、深鉢形土器・鉢形土器・浅鉢形土器・注口付土器・台付鉢形(浅鉢形)土器・台付異形土器などの「規範的な土器」(器種)において、特徴的な器形の土器が何種類もあって、また、帯縄紋系と入組紋系といった紋様体系別の器種の在り方も独特である。

以上は、精製土器という範疇のものである。他方、粗製土器が安行1式や安行2式に加わり、複雑な内容を呈する。その複雑さの一端は、山内清男が編集した『縄文式土器』(講談社)および『日本先史土器図譜』(先史考古学会)に掲載された安行1式や安行2式の土器群からうかがえる(以下、イタリックの数字表記例は『日本先史土器図譜』掲載土器で、それ以外は『縄文式土器』掲載土器)。

大多数の研究者は、大波状口縁深鉢形土器を細別して、安行1式から安行2式への漸進的な変遷を考えようとする。帯縄紋(縄紋が施される幅狭い細帯)が数段で波状口縁の紋様が構成される安行1式(62)を起点に、大波状口縁下に三角形区画が配されるものを安行2式と捉える訳であるが、その現象にだけ注目するために(なぜそのようにして三角形区画が登場するかを考えずに)、大波状口縁下に三角形区画が配される安行3a式との区別がつかなくなるのである(たとえば、鈴木1985、1987、1993、2012など)。

安行1式の大波状口縁深鉢形土器は、頸部に帯縄紋

がない段階(古段階)と頸部くびれ部直上に帯縄紋が登場する段階(中段階)とに分かれ、さらに、その頸部くびれ部直上の帯縄紋の最上段と口縁部数段の帯縄紋の最下段のものが接してしまい三角形区画を形成する段階(新段階)が抽出できる。安行1式の大波状口縁深鉢形土器の古・中・新の細別は、比較的共通認識になっているようである。

筆者は、安行1式大波状口縁深鉢形土器中段階に頸部くびれ部直上に帯縄紋が登場する現象は、台付鉢形土器からの影響と考える。当該台付鉢形土器とは、台部上の鉢形部分に水平に刻紋帯が配されたものである。その刻紋帯の構成が、大波状口縁深鉢形土器の頸部くびれ部直上に転写されたものが帯縄紋と考える。

安行1式大波状口縁深鉢形土器新段階の三角形区画は、安行2式台付鉢形土器においても台部上の鉢形部分に刻紋帯が水平に配される種類の土器と、台部上の鉢形部分に三角形区画が配される種類の土器(69では浅鉢)からの紋様構成上複合的な転写で、大波状口縁深鉢形土器の波頂部下に三角形区画が独立すると考え、それが安行2式の大波状口縁深鉢形土器(写真1)である。

以上は、先に「並行する土器どうしの「土器は土器から」を明らかにして来たのであり、漸進的変化ではない土器どうしの横関係を明らかにしたのである」と述べたことに関わる事例である。

(4)

1964年に、山内は安行2式の台付異形土器の細別に簡単に触れることがあった(山内(編)1964:185)。まず、安行1式例をあげ(197)、つぎに、安行2式の古い部分の例をあげ(199・200)、さらに、安行2式の最も新しい部分の例をあげた(198)。その最も新しい部分の例(198)は、67の土器のことでもある。

『日本先史土器図譜』では、台付浅鉢形土器(69)については、口径15.8、高さ14.9、脚付着部5.2、脚端約9.4と大きさを解説した(単位cm)。台付異形土器(67)については、口径8.8、高さ10.5、脚付着部4.2、脚端約7.4と大きさを解説した(単位cm)。二つのカテゴリーを異にする土器それぞれの同じ部分に山内が注目して解説していることに、筆者は興味をひかれる。

筆者からみれば、台付異形土器を基準にして台付鉢(浅鉢)形土器が考案されたと思われるのである。安

行1式や安行2式の台付鉢（浅鉢）形土器は台付異形土器から転生する特異な仕組みがあると考えている。台付異形土器の脚部（台部）とその上の部分という分節構造を、より大きな脚部（台部）とより大きな鉢（浅鉢）形土器で写して別の規範的な土器を創成する仕組み（“ハイパートロフィー”）があることを指摘したい。

安行1式と安行2式の型式内容は、器種や精製・粗製では理解しきれないものとする。台付異形土器からの“ハイパートロフィー”として、台付鉢（浅鉢）形土器がつくり出され、その台付鉢（浅鉢）形土器の紋様構成が大波状口縁深鉢形土器の構成に反映されるという別の仕組み（親和関係）があると考えている。

さらに、安行1式や安行2式を考える場合に、粗製土器と精製土器において共通の紋様とその施紋の際に“同じクセ”がみられることにも言及したい。

要点を述べるならば、粗製土器である附点紐線紋土器の特徴となる点列紋（口縁部や胴部の沈線区画中に点々とめぐる紋様）は、この粗製土器に限らず、精製土器にも施されるのである。たとえば、帯縄紋系大波状口縁深鉢土器のくびれ部に点々とめぐる点列紋が、実は、この附点紐線紋の点列紋と同じなのである。同じと判断する根拠は、当該点列紋の下方に沿って小刻紋が単列ないし複列並ぶ場合があるが、そのあり方を施紋時のクセとみるならば、粗製土器でも精製土器でも同一なのである⁵⁾。

逆にいえば、隆帯を貼り付ける紐線貼付紋土器（粗製土器）には点列紋は全くといって良いくらいみられないのである。また、精製土器の場合にも点列紋が施紋されない土器が多々ある。たとえば、帯縄紋系大波状口縁深鉢土器であっても、くびれ部に点列紋がめぐる例がある（安行2式帯縄紋系大波状口縁深鉢土器201）。

附点紐線紋土器と紐線貼付紋土器は分布域が異なることも勘案して（金子1972、1989；鈴木1969）、少なくとも、点列紋を共有する粗製土器と精製土器とは同じ土器製作者集団が製作したものと筆者は考える。たとえば、堀之内貝塚出土の安行2式帯縄紋系大波状口縁深鉢土器は、くびれ部に点々とめぐる点列紋がある（写真1は全形で写真2はくびれ部の拡大）。その点列紋は、附点紐線紋土器の点列紋と同一紋様である。そのような重大な議論を観察で考えてもらうために、堀之内貝塚出土の安行2式帯縄紋系大波状口縁深鉢土器を演習や講義で活用しているのである。

どうやら、安行1式や安行2式を考える場合、多く

の規範的な精製土器群が縦横に複雑な連絡具合を呈しながら存在する背景には、異なる粗製土器が分布域を異にすることから判断して異なる土器製作者集団がいくつもあり、異なる土器製作者集団が多くの規範的な精製土器群に対してさまざまな程度の違いのあるかわり具合を有すると推測しているのである。

ところで、渡辺仁は、1990年に、『縄文式階層化社会』（六興出版）を著した。進化主義を背景に土俗考古学のコンセプトに貫かれた該書は、縄紋社会は身分の上下貴賤のない平等社会などではなく、富裕層（上層）と貧者層（下層）とに分離した階層性の様態にあり、その階層化社会は男性の生業分化（大形動物捕獲活動：クマ猟およびカジキ漁）によってもたらされた、と説いて大きな話題となった。しかも、縄紋人の中に階層があったと考える第一の手がかりが縄紋土器そのものである、と主張した。つまり、縄紋土器は、階層化された社会の、その上層部のメンバーが専門的に縄紋土器を作り、しかも、その縄紋土器は上層部の政治的指導者達が保有する財宝になっていた、と主張した。縄紋土器は専門的集団が製作する高度工芸品であると渡辺は強調したが、各地の集落どこでも縄紋土器は作られたと考える山内清男らに通有の見方とは大きく異なるものであった。

だが、縄紋社会の構造、とくにその階層性と土器の社会的機能をあわせて検討することを本旨としたことは、著者の意図にそっては理解されていないようで、したがって、『縄文式階層化社会』は成功した著作とはいえないであろう。しかしながら、土器の社会的機能を社会の階層化と関連づけて論じたことこそは、今日的に再評価に値すると考える。

安行1式や安行2式にかかわる土器製作者集団の在り方を筆者なりに推測するならば、渡辺が専門集団による高度工芸品製作という論点を加えたことにも倣いながら、土器の社会的機能を社会の階層化と関連づけてどのような展望が開けるかを考えることこそが今日的課題と考える。

(5)

階層化社会という論点については、今日、渡辺仁以外にも、強調点を異にしながら多くの論攷が公刊されてきた。

以下に、表的な論者である佐々木藤雄と高橋龍三郎の階層化社会にかかわる論説を引用して、土器の社会的機能を社会の階層化と関連づけて論じたことが、渡

辺の視点であることを確認したい。

では「階層差」とは何かと問われるならば、本稿ではそれを、分業、すなわち個別的生産諸力の発達と余剰の一定の蓄積を基盤とした社会的・経済的な不平等・不均等にもとづく威信的な序列である、と定義しておきたい。ただし、この威信的な序列による上限、優劣、貴賤という区分はあくまでも量的・漸移的な差であり、生産と所有との分裂、すなわち社会的分業の歴史的な成立にもとづく、支配と被支配、搾取と非搾取などの強制関係をともなう「階級差」とは本質的に区別される。

(佐々木 2002 : 34-35)

階層化社会とは複雑化した多様な社会の実態を包括的に捉えた概念で、一義的に定義することは困難であるが、おおよそ富や資源、社会的地位への接近に対して社会的格差があること、またそれらの利益に際して権利の世襲がなされることなどが基準として定義されている。多くの未開社会では、一人のリーダーを頂点に社会が組織化され、社会的不平等が顕著にみられることも多い。また階層化に向かう過程の社会もある。(高橋 2004 : 112)

階層化社会とは元来 M. フリードの用語で、位階社会の果てに登場する社会的段階で、富の集積と出生による財産や地位の継承が制度的に確立した社会のことである。…/縄文時代にそのような定義に一致する階層化社会が出現したかどうかについては、筆者は疑問をもっている。むしろその過程にある社会とみなした方が適切であろう。その意味で、筆者は B. ハイデンの提唱するトランスエガリタリアン社会(階層化過程にある社会)に近似した社会であろうと考える。(高橋 2004 : 127)

付言するならば、佐々木(1973)は、1973年刊行に鑑みれば、階層化社会論としては先駆的なものであろうと評価したい。また、その論旨は、大きな気候変動との対応がみてとれる点で、興味深いものである。他方、高橋は海外の関連する論説を吟味して国内で紹介しつつ、縄文時代の階層化社会の出現については、慎重な姿勢をくずしていない。

(6)

階層化を認める者と認めない者が、近年、二項対立的に並存しているというレビュー(中村 2015)を知っ

た。階層化にかかわるレビューとしては不十分である。何故ならば、階層化にかかわる論攷は、山内清男による土器研究の中にすでに盛り込まれていたことに気づいていないからである。

当該レビューは、山内清男の漸進的変化を基調とする進化主義考古学ないしは社会進化論考古学の方策を種々盛り込んだ縄紋式モデル(山内 1969 : 94-95〔「縄文文化とそれをとりまく大陸の文化、自然」〕)が全く視野に入っていないのである(以下、YSJモデル)。

YSJモデルは、実は、亀ヶ岡式精製土器の移入・模倣現象(山内 1930、1967)を手がかりにして、日本列島の高級狩猟民が築く部族社会(山内 1969 : 88)は、縄紋晩期には、部族社会間での階層化が進行したということが含まれたモデルである。亀ヶ岡式精製土器の移入・模倣現象の背景には、亀ヶ岡式精製土器の優品が移入され、さらに移入先の人々にその優品が模倣されるという図式が想定された訳である。

以下の説明は、亀ヶ岡式文化圏外の場合である。

山内 亀ヶ岡式のような精製土器の製作には男が関係している。それは文様のつけ方が彫刻的手法になって、土器以外の木器や骨角器なんかの文様と一致してることから言えるんです。(山内ほか 1971 : 73)

山内 関東の安行の普通の土器は女でしょう。関東の女ですがね、それらも東北の亀ヶ岡式をこりゃいって真似たかもしれない。亀ヶ岡式では男が木器を彫刻し、骨角器を彫刻する、そういう共通なテクニックを応用してはじめて亀ヶ岡式が出来る。女がやってもそれはできないと、そういうふうに見えるわけです。それで亀ヶ岡式ってのは男が作った。それには非常に粘土材料を選んでいて。粘土をかかわして粉にし、その粉から選別して非常に緻密なキメ細かいものをこしらえる、そうでないと施文のとき粒が邪魔をする、そういう点をも知らない人には出来ない。(山内ほか 1971 : 73-74)

また、亀ヶ岡式文化圏内の場合でも、つぎをよく読めば、優品の移入およびその模倣品作成が想定されたといえるのである。

亀ヶ岡式の精製土器と粗製土器 この型式では精製土器と粗製土器が分化している。粗製土器は深鉢形が主で縄文の加えられたものが多い。土着的な土器と考えられる。縄文の性質等が地方によって異っており、これを念頭において細かい地方差を考えてもよい。精製土器は土質が選ばれ、

形の変化が多く、装飾が多い。これは各地でも作られたであろうが、東北の各地間でも製作地から移動されたと考えられる。(山内(編)1964:149)

以上をあわせれば(大塚2007:188-191)、以下の図式が描けると考える。

●(亀ヶ岡式文化圏内で製作地から移動された精製土器<優品>)の模倣から、◎(亀ヶ岡式文化圏内の土着的な精製土器)が生じる。また、●(亀ヶ岡式文化圏外へ移入された精製土器<優品>)の模倣から、◎(亀ヶ岡式文化圏外において亀ヶ岡式類似の土器)が生じる。つまり、●(亀ヶ岡式文化圏内で製作地から移動された精製土器<優品>)=●(亀ヶ岡式文化圏外へ移入された精製土器<優品>)で、◎(亀ヶ岡式文化圏内の土着的な精製土器)=◎(亀ヶ岡式文化圏外において亀ヶ岡式類似の土器)である。

ということは、亀ヶ岡式精製土器を優品として高く評価する価値体系が日本列島に広く存在し、その優品ないし模倣品を必要とする社会体制が日本列島に広く存在し、その優品ないし模倣品を使用する環境が日本列島に広く存在したことになるであろう。山内が見いだした亀ヶ岡式精製土器の移入・模倣現象は、日本列島に広く、亀ヶ岡式精製土器の格付けにかかわる評価体系や、それを必要とする体制、およびそれを使用する環境の存在を認めたといえるので、学史的にきわめて重要であると考えられる。

さらに指摘すべきは、亀ヶ岡式精製土器が優品である限り、それは日本列島各地の部族社会がよく似た仕組みをもちつつ、東北地方の部族社会と他地方の部族社会間の階層化と東北地方の部族社会内部での階層化が同時に出現したことが縄紋晩期に窺えることである。山内は、社会進化的な事象として、いわば部族社会間階層化論を試みたといえよう。他方、渡辺仁は、社会進化的な事象として、縄紋時代の各地方社会内階層化論を試みたといえよう。亀ヶ岡式精製土器移入・模倣現象の意義がこれまでかえりみられなかったことは、『縄文式階層化社会』の評価にもかかわるので、残念なことといわざるを得ない。

YSJモデルを短期編年の主張として受け取り、それを学史の中にしまいこんではならないであろう。YSJモデルは、第一に、気候変動を基準にして、時代変化(「旧石器時代」→「無土器新石器時代」→「新石器時代」)を描いた(ただし磨製石斧は新石器時代に属すると決めつけた)。第二に、新来文化の出現については、それ以前の気候からの大きな変化(寒冷化・温

暖化・冷涼化)を契機に、動植物について寒冷化・冷涼化すれば北方系のものが南下し、温暖化すれば南方系のものが北上するということが基本であることをわきまえつつ、大陸からの伝来という図式で説明しようとした。第三に、縄紋文化は、冷涼な気候のもとで存続したことが説明されていた。山内が漸進的な進化主義を採る以上、気候変動如何および適応如何は重要な論点であるから、第一～三は当然な主張であろう。

YSJモデルでは、一方で、新来文化(縄紋文化)の出現は気候の大きな変化を契機とし、他方で、縄紋文化の存続はある特定の気候環境(冷涼な気候)への適応として理解されていた。晩期亀ヶ岡式精製土器の移入・模倣現象は、YSJモデルでは、中期は「冷涼」、後期は「気候悪化始る?」、晩期は「部分的? 文化凋落」という気候環境の悪化の中で出来たことになる。

山内が、芹沢長介による長期編年の起源論(芹沢1962a・b・c、1969)に反対なのは、様々な理由や信念が上げられるが、芹沢の議論では、縄紋文化が異なる気候環境のもとでも存続したことになるからである。縄紋土器一系統説(縄紋土器は年代よっても地方によっても截然と分かち得ない一体の土器とみなし、かつ、その由来は大陸伝来とみなす考え)を共有する二人であったが(大塚2013)、長期編年では、縄紋文化が異なる気候環境のもとでも存続してしまうことを認めてしまうのである。それは、縄紋文化はどのような気候環境下にもかかわらず存続したと言明することになる。

山内のYSJモデルのメリットは、冷涼な気候が続く中で適応したからこそ縄紋文化が存続したと説明できることであった。逆言すれば、異なる気候環境下でも土器文化の展開を想定せざるを得ない場合は、縄紋土器一系統説は見込み違いとなるはずである。今日、縄紋土器一系統説の是非を問うことなく、縄紋文化は気候環境の如何にかかわらず長期に存続したという言説が熱心にくり広げられているが(たとえば、今村1999、2002、2004、2014など)、適応という論点を欠いたそれらは、いかなる環境下でも1万年をはるかに超える長大な期間存続した“ハイパー縄文文化”を必然的に説かざるを得ないものである。

他方、ここで山内側の難点について触れておきたい。山内にとっては、並行型式群の異所的布置が大前であった。並行型式群の異所的布置というのは、平たくいえば、型式群を同時代的にみると、別々の地方に別々の型式が分布するという見方で、並行型式が同所

的に存在することを想定しない見方でもある。この見方を大前提するからこそ、●（亀ヶ岡式文化圏外へ移入された精製土器〈優品〉）に関わるのは他型式加担者となり、他型式文化圏に見いだされる精製亀ヶ岡式土器の存在性格を、●/◎のどちらかで解釈することになる。山内の立場では、亀ヶ岡式の加担者が他型式文化圏内に精製土器を持ち込んだという事態や、亀ヶ岡式の加担者が他型式文化圏内に行ってそこで精製土器を製作したという事態は、はじめから排除されているのである。

となると、移入・模倣論が描くのは、先験的判断である並行型式群の異所的布置によって、必然的に亀ヶ岡式文化圏と他型式文化圏の間をモノ（精製亀ヶ岡式土器）が動くような世界に限られることになり、往時の人々はそれぞれの文化圏の中に止まることが想定される一方、人々の往還・交流は最初から想定外であったといわざるを得ないのである。したがって、興味深い移入・模倣論ではあるが、そのまま受け入れる訳にはいかないのである。

(7)

ところで、芹沢長介（1962c）は、土器の登場をデンプン質の加熱調理の道具の登場として評価していた。YSJモデルでも、実は、縄紋土器の役割としてドングリなどのデンプン質の加熱調理が示唆されるのであるが、山内本人は、積極的には論じていないことを、この際、指摘しておきたい。ちなみに、階層化社会を考える場合、幼児・子どもから老人までも視野に入れて考えるべきことが、最近、指摘されている（山田2014）。土器は、煮沸容器として、幼児・子どもから老人までもが口にすることができるものの範囲を大幅に広げてくれたことが、つとに指摘されていた（後藤1980）。土器の登場は、往時の人びとにとって安心・安全な食事を万人に提供してくれるきわめて優秀な道具の登場を意味したといえよう。以後、高度工芸品となったことは想像に難くない。であれば、それを製作できる人びとはいわば尊敬を集めたと想像することもあながち不当ではないであろう。

土器の高度工芸品としての特性および生態学的な特性に鑑みれば、いわば博物学的な知識をもつ人びとの組織ないし集団によって博物学的な知識が最大限に集約されたものが土器であり、そのような知識ないしは情報を熟知した人びとの集う場所を想定する必要がある。土器は、粘土を用いることの製作上の理由から

乾燥と焼成の工程が必須で、集団による実施・管理が伴い、製作・使用上壊れやすいという制約から、定住的な場所での作業を想起しなければならないからである。見方を変えれば、そこへいけば博物学的な知識ないしは情報を得られ、さらには、他地方の人びととの邂逅も叶う場所＝媒介中心性を備えた“ハブ（hub）”が形成された可能性も考えられる。

そのように縄紋土器ないしは縄紋文化について研究上の紆余曲折を理解した上で、安行式土器の観察を深めて該式にみられるさまざまな連絡具合の理解を深めてくると、『縄文式階層化社会』の問題意識から導かれて、安心・安全な食事を万人に提供してくれるきわめて優秀な道具・煮沸容器の専門的な製作者集団が各地方社会の上層部に位置して政治的な指導も担うという階層化社会が存在したとの想定に到達するのである。

安行1式および安行2式は、階層化社会の恰好の事例研究の材料となり、掘之内貝塚から出土した安行2式大波状口縁深鉢形土器（写真1・2）は、実物としてきわめて重大な情報を提供してくれるのである。

註

- 1) 黒沢浩は、日本考古学における常套手段ともいえる“移行期の設定”や“時代区分論”にまでも批判的検討を進めている（黒沢2011b）。
- 2) 今村啓爾は、“縄文文化論”を精力的に世に問い続けている（今村1999、2002、2004、2014など）。
- 3) 高級狩猟民については、「定住し、計画的狩猟又は漁撈を事とした」（山内1935a：76）との説明がなされ、「縄紋式は高級狩猟民と考えられるし、欧亜北方一帯には新石器時代で農業が無く狩猟生活をして居た文化が長期に亘って残存して居た訳だから、或はこの方に連絡が付くかも知れない」（山内ほか1936：45）との説明がなされた。さらに1964年に、高級狩猟民については、ドングリ採集も主要な生業であることが加えられた（山内（編）1964：142）。高級狩猟民のポイントは、定住とさまざまな生業に計画的にかかわることである。
- 4) 川西幸幸は、欧州先史考古学の三時代区分に対比して、山内の「縄紋式文化」⇒「弥生式文化」⇒「古墳時代」を最も整った「和製」の時代区分と評したが（川西2008：5）、「和製」を強調する川西の見解には反対である。欧州先史考古学の三時代区分と山内の時代区分のどちらが、よりよく漸進的变化をいいあてているかという進化主義考古学の実践から評価すべきであろう。瀬口眞司（2014）は、そもそも、進化主義

考古学への理解が乏しく時代区分論の意味をわきまえていないために、山内の「縄紋式文化」⇒「弥生式文化」⇒「古墳時代」の意義がみえていない。そのことは、欧州先史考古学の三時代区分法を国際標準とみなしてしまうという瀬口の誤解につながってしまうのである。

- 5) 一見すると、附点紐線紋土器(粗製土器)のようであるが、区画線が複数条となりしかもその中あるいはそれに沿って並ぶ刺痕の片側がやや盛り上がるクセをもち、点列紋の刺痕やその区画線とは明らかに異なる粗製土器が栃木・寺野東遺跡でまとまって検出された。刺痕の片側がやや盛り上がるクセは、点列紋の刺痕にはみられないことや、この種の土器の場合、点列紋の下方に並走する小刻紋(本文中で論じた)がみられないことから判断すると、施紋動作がかなり違うといえるであろう。別種点列紋の粗製土器と呼んでおく。また、別種点列紋が施された精製土器もあり、それは安行2式と考えられる。別種点列紋の粗製土器の年代的な位置づけに参考となる。

引用・参考文献

今村啓爾

- 1999『縄文の実像を求めて』、歴史文化ライブラリー76、吉川弘文館。
2002『縄文の豊かさと限界』、日本史リブレット2、山川出版社。
2004「日本列島の新石器時代」『東アジアにおける国家の形成』、日本史講座1、歴史学研究会・日本史研究会(編)、東京大学出版会、36-63頁。
2014「世界史における縄文文化の位置づけ」『縄文時代(下)』、講座日本の考古学4、今村啓爾・泉拓良(編)、青木書店、652-669頁。

大塚達朗

- 1981「小豆沢出土安行3a式深鉢再考」『彌生』11:14-22。
2000『縄紋土器研究の新展開』、同成社。
2007「型式学の射程—縄紋土器型式を例に—」『現代社会の考古学』、現代の考古学1、岩崎卓也・高橋龍三郎(編)、朝倉書店、184-201頁。
2013「縄紋時代のはじまり(草創期)—そのアポリア—」『縄文時代(上)』、講座日本の考古学3、今村啓爾・泉拓良(編)、青木書店、119-147頁。
2015a「解題」新屋雅明『縄文時代後・晩期土器編年の研究—加曾利B式~安行式土器群の変遷に—』、六一書房、257-268頁。
2015b『“縄文式階層化社会”の意義を考える—縄文文化の脱構築のために—』講演要旨・資料』、早稲田大学総合人文科学センター研究部門「社会の複雑化・階層化の史的パースペクティブ」。

金子裕之

- 1972「安行系紐線文土器における二者」『信濃』24(7):64-70。
1989「安行式土器様式」『後期 晩期 続縄文』、縄文土器大観4、小林達雄(編)、小学館、287-290頁。

川西宏幸

- 2008『倭の比較考古学』、同成社。
2015『脱進化の考古学』、同成社。

黒沢浩

- 2011a「「遠賀川式」の思想」『南山大学人類学博物館所蔵考古資料の研究』、南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告4、黒沢浩・西江清高(編)、南山大学人類学博物館、67-83頁。
2011b「縄文/弥生考—「縄文・弥生移行期」は可能か?—」『論集 縄文/弥生移行期の社会論』、伊勢湾岸弥生社会シンポジウム・前期篇、石黒達人・伊勢湾岸弥生社会シンポジウムプロジェクト(編)、ブイーツソリューション、1-20頁。

甲野勇

- 1976『縄文土器のはなし』、學生社。

後藤和民

- 1980『縄文土器を作る』、中公新書582、中央公論社。

佐々木藤雄

- 1973『原始共同体論序説』、共同体研究会。
2002「環状列石と縄文式階層社会—中・後期の中部・関東・東北—」『縄文社会論(下)』、安斎正人(編)、同成社、3-50頁。

佐藤達夫

- 1974「縄紋式土器」『日本考古学の現状と課題』、日本歴史学会(編)、吉川弘文館、60-102頁。

鈴木加津子

- 1985「縄文時代晩期の土器」『外塚』、外塚遺跡調査会(編)、下館市教育委員会、221-262頁。
1987「安行3a式形成過程の一考察」『埼玉の考古学』(柳田敏司還暦記念論文集)、新人物往来社、183-198頁。
1993「真福寺考—安行式と亀ヶ岡式における編年と分布の推敲—」『埼玉考古』30:15-62。
2012「大宮台地鳩ヶ谷支台の晩期初頭の土器—土坑出土土器から見る縄文時代後期/晩期の界線—」『古代』128:27-47。

鈴木公雄

- 1969「安行系粗製土器における文様施文の順位と工程数」『信濃』21(4):1-16。

瀬口眞司

- 2014「世界の中の縄文文化—国際化への布石—」『考古学研究』61(2):16-29。

芹沢長介

- 1962a「日本の旧石器文化と縄文文化」『原始社会の解体』、古代史講座2、石母田正ほか(編)、學生社、

- 301-332 頁。
- 1962b 「旧石器時代の諸問題」『原始および古代〔1〕』、岩波講座日本歴史 1、岩波書店、77-107 頁。
- 1962c 「土器の起源」『自然』17(11)：29-35。
- 1969 「日本の旧石器時代 たしかめられた旧石器人の存在」『古代〈日本〉先史—5 世紀』、日本と世界の歴史 1、田中豊（編）、学習研究社、76-85 頁。
- 高橋龍三郎
2004 『縄文文化研究の最前線』、早稲田大学文学部。
- 中村大
2015 「2013 年度の日本考古学界 5 縄文時代研究の動向」『日本考古学年報』66（2013 年度版）、日本考古学協会、24-30 頁。
- 堀越正行・領塚正浩（編）
1992 『堀之内貝塚資料図譜』、市立市川考古博物館調査報告 5、市立市川考古博物館。
- 水ノ江和同
2015 「縄文土器の器形と文様の系譜について—九州縄文時代早期後半期の壺型土器における可能性—」『九州考古学』90：1-19。
- 山田康弘
2014 『老人と子供の考古学』、歴史文化ライブラリー 380、吉川弘文館。
- 山内清男
1929 「関東に於ける繊維土器」『史前学雑誌』1(2)：1-30。
- 1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』1(3)：1-19。
- 1932a 「日本遠古之文化 一 縄紋土器文化の真相」『ドルメン』1(4)：40-43。
- 1932b 「日本遠古之文化 二 縄紋土器の起源」『ドルメン』1(5)：85-90。
- 1932c 「日本遠古之文化 三 縄紋土器の終末」『ドルメン』1(6)：46-50。
- 1934 「真福寺貝塚の再吟味」『ドルメン』3(12)：34-41。
- 1935a 「八幡一郎 北佐久郡の考古学的調査」『人類学雑誌』50(2)：74-76。
- 1935b 「縄紋式文化」『ドルメン』4(6)：492-495。
- 1937a 「日本に於ける農業の起源」『歴史公論』6(1)：226-278。
- 1937b 「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』1(1)：29-32。
- 1939 『日本遠古之文化』、補註付・新版、先史考古学会。
- 1967 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『山内清男・先史考古学論文集』3、先史考古学会、113-128 頁。
- 1969 「縄文文化の社会 縄文時代研究の現段階」『古代〈日本〉先史—5 世紀』、日本と世界の歴史 1、田中豊（編）、学習研究社、86-97 頁。
- 山内清男ほか
1936 「座談会 日本石器時代文化の源流と下限を語る」『ミネルヴァ』1(1)：34-46。
- 1971 「山内清男先生と語る」『北奥古代文化』3：59-80。
- 山内清男（編）
1964 『縄文式土器』、日本原始美術 1、講談社。
- 1967 『日本先史土器図譜』（再版・合冊）、先史考古学会。
- 渡辺仁
1990 『縄文式階層化社会』、人類史叢書 11、六興出版。

【後記】

小論は、2015 年度に、南山大学人文学部から筆者に与えられた特別配分研究費による研究成果の一部であることを明記する。

（南山大学人文学部教授）



写真1 堀之内貝塚・安行2式土器（南山大学人類学博物館蔵・如法寺慶大撮影）



写真2 堀之内貝塚・安行2式土器（南山大学人類学博物館蔵・如法寺慶大撮影）

Angyo-2 Type Pottery on Display

OTSUKA Tatsuro

The author explains about the significance of the Angyo-2 type pottery which is on display at the Anthropological Museum of Nanzan University. Specifically, surveying pottery which have the same style and pattern as the Angyo-2 type on display, they can be divided into two kinds: one has a unique pattern on a specific part, the other has no such patterns. It is supposed that such a difference – having the unique pattern or not – came from the different potter groups.

土偶に描かれた線刻画

——愛知県西尾市清水遺跡の事例から——

植木 雅博

はじめに

本稿は、南山大学人類学博物館に現在収蔵されている、愛知県西尾市清水遺跡から出土した土偶（以下、清水土偶）について再度資料化を行い、併せて若干の検討を行うものである。

清水土偶については、既に紅村弘（紅村 1959、紅村 1984）、金森昭憲（金森 1992）によって実測図等の公表がなされているが、表題に掲げた通り、線刻画と考えられる特異な要素が見受けられることから、構成要素の点検や類例の検索等を行いつつ、若干の私見を述べたい。

1. 資料の概要

清水遺跡は矢作川の下流沿岸、碧海台地の西端に位置する遺跡で、1950年・1956年に南山大学の中山英司氏・紅村弘氏らによって発掘調査が実施された。縄文時代晩期から弥生時代中期前半、及び弥生時代後期から古墳時代の土器が主に出土し、そのほかに土偶、貝輪、土錘、石器が出土している。

紅村氏の記述によれば、基本層序は灰色砂層（縄文時代晩期前半）、黒色土層（縄文時代晩期末葉～弥生時代中期前半）、混土貝層（弥生時代後期～古墳時代）に分層できるが、弥生時代後期の堅穴住居のほかに遺構は確認されていないという（紅村 1959）。なお、土偶は第1次調査で第8トレンチから出土したとされるが、詳細な出土状況については明らかでない（安藤ほか 2007）。

2. 土偶の特徴と構成要素

清水土偶について、実測図と拓影を第1図に示した。頭部・肩部の形態は不明だが、胸部のやや上から脚部までが残存する。直線的な胴部から左右に腰部が

張り出し、短い脚部をもつ平面形をなす。欠損部を観察したところ、縦長の棒状粘土を2本貼り合わせて板状の胴部を成形したのち、腰・脚部を継ぎ足して製作されたようである¹⁾。

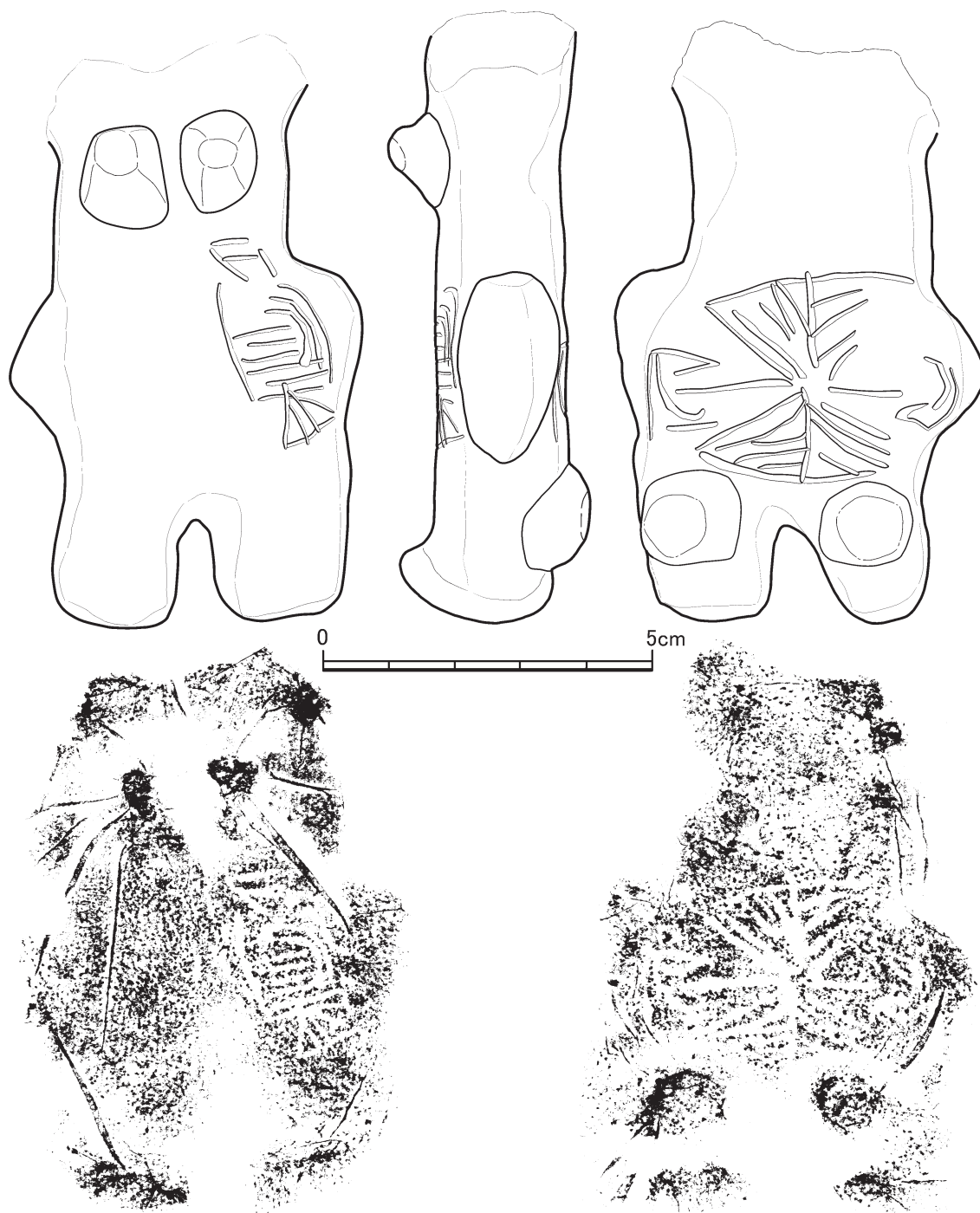
断面形はほぼ平板状で、立体的な要素は多くないが、前面（第1図左）の胸部、背面（第1図右）の脚部付け根にそれぞれ2個一対の突起を貼付けるほか、脚部の先端を前方向につまみ出している。胸部の突起はやや丈高の円錐形で、上・左右側は直立気味、下側はなだらかに頂部から基部へ傾斜する。脚部付け根の突起は円盤状で丈が低く、頂部は丸みをもちつつ平坦な面をなす。前者は乳房、後者は臀部を表現したものであろう。なお、脚部の底面には丸みがあり、土偶を直立させることはできない。

色調は一見すると淡い黄褐色だが、全体的に表面の風化が著しい。あまり風化や摩耗の及んでいない沈線内部は暗褐色を呈しており、後者が本来の色調だったのだろう。胎土中には石英のほか、花崗岩質の白色粒子、少量の金雲母を含む。

さて、清水土偶の最大の特徴として、腰部の前面・背面には、先端の鋭い棒状工具による線刻が焼成前に施されている。どちらも土偶に施されるものとしては特異であり注意を引く。まずは土偶の帰属時期や系統について検討し、その後これらの線刻についても若干の検討を試みる。

3. 土偶の時期と系統

清水遺跡の出土土器は、未報告の破片資料も含めて、肋条の太い貝殻条痕で調整・施文されたものが大半を占めており、それらは弥生時代前期・樫王式から弥生時代中期・岩滑式までの期間にまたがると思われる（第2図）。器形や突帯の形状、文様、器種などで時期の判別できる資料としては3・4が樫王式、10・11が水神平式、6・8が水神平式または岩滑式1期、



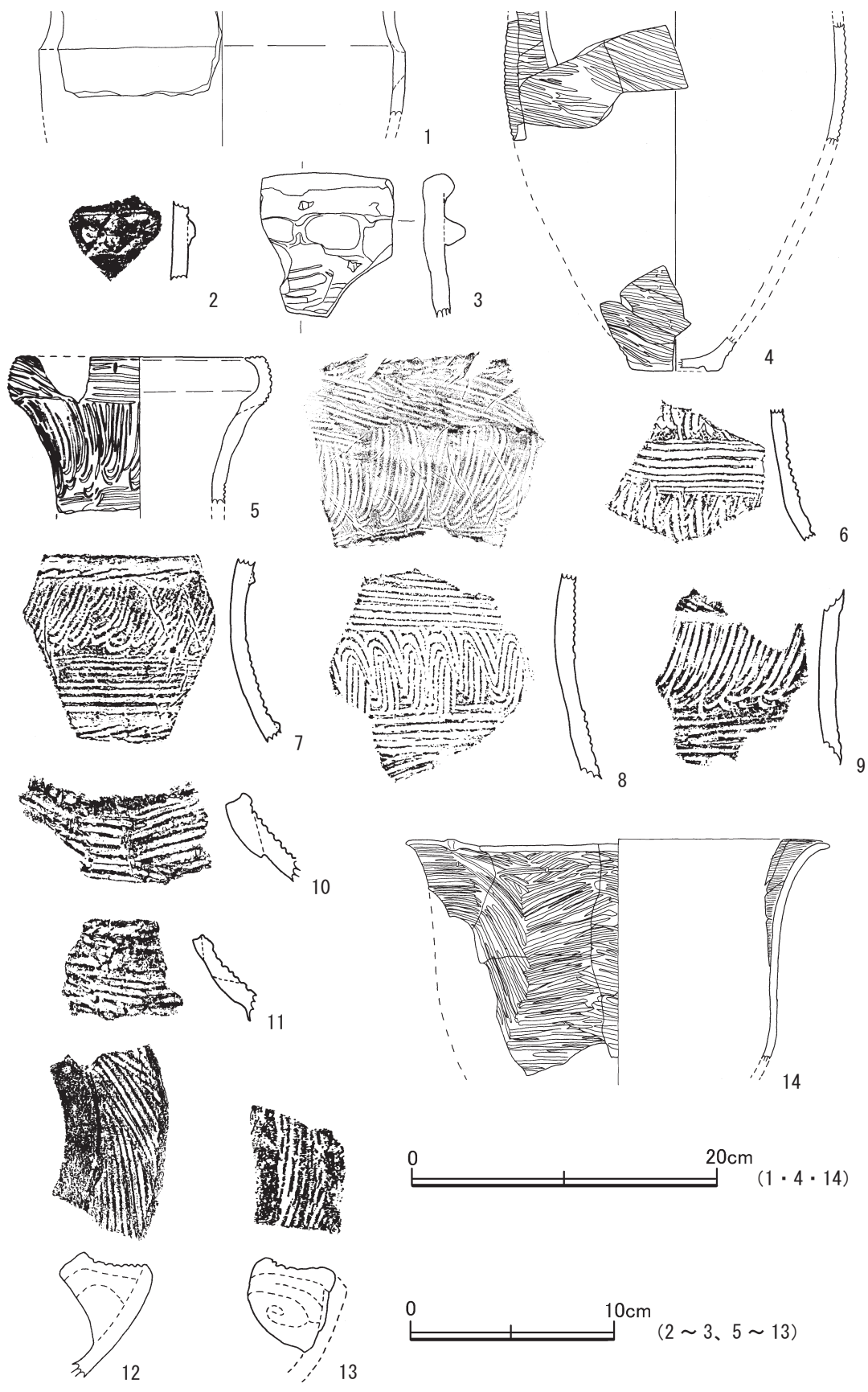
第1図 清水遺跡出土土偶

12・13は岩滑式、5・7・9が岩滑式3期と考えられる²⁾。また、14など口縁部に指頭押捺をもつ甕は瓜郷式に帰属する可能性があるだろう。なお、1・2のように縄文時代晩期末葉の突帯文土器も出土しているが、図化されていないものも含め点数はかなり少ない³⁾。

清水土偶の時期については、黒色土層から出土したことから紅村氏が「やはり条痕土器に共存したものであろう」と弥生土器に伴う可能性を示唆している。こ

のほか、前田清彦氏は縄文時代晩期末葉から弥生時代前期の土偶を集成しつつ、当該土偶の時期にも言及しており、弥生時代前期の檜王式期に比定している（紅村1959、前田1988）。

筆者も突帯文土器の僅少さから、両氏と同様に縄文時代晩期ではなく檜王式期以降と推測するが、遺構からの出土ではないため、さらに厳密な時期を絞り込むのは困難といわざるをえない。なお、清水土偶の胎



第2図 清水遺跡出土土器

土・色調などの特徴を同遺跡の出土土器と比較すると、檜王式・水神平式よりも、むしろ岩滑式（第2図5など）と類似しており、弥生時代中期前葉まで時期が下る可能性も考慮しておきたい。

さて、東海・中部高地における縄文時代晩期末葉から弥生時代前期の土偶は、先述の通り前田氏により集成され、形態等の特徴をもとに、土偶の頭部と体部が分類されている。前田氏による土偶体部の分類では、清水土偶はa類（平板な立像形全身像）のうち、a-1類（胴部は長方形を基本とし、肩部・腰部を立体的に表現せずシンプルな形態をとる板状土偶）に該当するという（前田1988）。

しかし、清水土偶にみられる背面の円盤状突起は、むしろa-3類（肩部・腰部を隆帯や瘤により強調させ、やや立体的な表現をとる板状土偶）に通有のものである。

前田氏は、a-3類には「乳部を表現した例は認められない」と述べており、これが清水土偶をa-3類に含めなかった根拠と思われる。しかし、豊川市麻生田大橋遺跡の調査による資料の増加からか、a-3類には「乳部表現が認められるもの」と「欠如するもの」の両者があり「後者の方が卓越する」と、後に見解を修正している（前田1993）。

清水土偶と体部形態が類似した好例としては、ほぼ完形で、同じくa-3類に分類された麻生田大橋遺跡SK125出土土偶2点（第7図1・2）がある⁴⁾。両者ともに乳房表現があることから、a-3類でも少数な部類に該当する。これらの形態を考慮すると、清水土偶の欠損した肩部には隆帯がめぐる可能性があるだろうか。

なお、頭部の類型についてだが、当該期の土偶は頭部・体部のいずれかを欠損しているものが大半で、両部位の各類型がどのように組み合わせるかは判断材料に乏しい。清水土偶についても、どのような頭部であったのか憶測の域を出ないが、体部形態の類似する麻生田大橋SK125例を参照するならば、頭頂部から後頭部に結髪表現をもち、簡素な鯨面表現をもつ頭部が組み合わせられるのかもしれない。いずれにしても、前田分類の体部a-3類に該当する形態的特徴は、東海西部在来の系統から大きく逸脱するものではない。

4. 線刻画の特徴

清水土偶の、線刻画とみられる二つの構図について述べる。まずは前面から特徴を確認しよう。腰部には上下左右に非対称な構図が沈線で描かれ、大まかに三

つのパーツに分けられる。

① 上部にはコの字状の構図を描き、その内側に短い直線を付加する。

② 中央には外枠として、ゆるい弧状の沈線とカーブ気味の直線を描き、その内側には外枠に沿った弧線2本のほか、外枠に垂直な短線5本を描く。

③ 下部には三角形の構図を描き、内側に短線2本を充填する。

これら三つのパーツが縦に並び描かれるさまは、一見すると「魚」を描いたように見え、①は頭部、②は体部と胸ビレ、③は尾ビレを表現したものという印象を受ける。

次に、背面の構図について、観察した描き順に沿って述べる。

① 横方向の直線2本で、構図全体の上下端を区画する。

② 区画線①の間に、交差しない直線4本を十字状に配置する。

③ 沈線②を中軸として、上下対称の三角形を二つ描き、それぞれ内側に斜線を充填する。

④ 沈線②の左右端に、C字状またはΣ形に似た構図を配置する。両者はおおむね左右対称に近い形状である。

二つの構図はどちらも、線刻画なのか、それとも文様など他の表現とみるべきか即断がためられるが、土偶に付随する表現はどんなものがあるだろうか。やや乱暴かもしれないが、立体的・平面的なものを問わず、簡潔にまとめてみると以下のように類型化できよう。

① 身体部位（目・鼻・口・眉筋、乳房、尻、性器、指など）

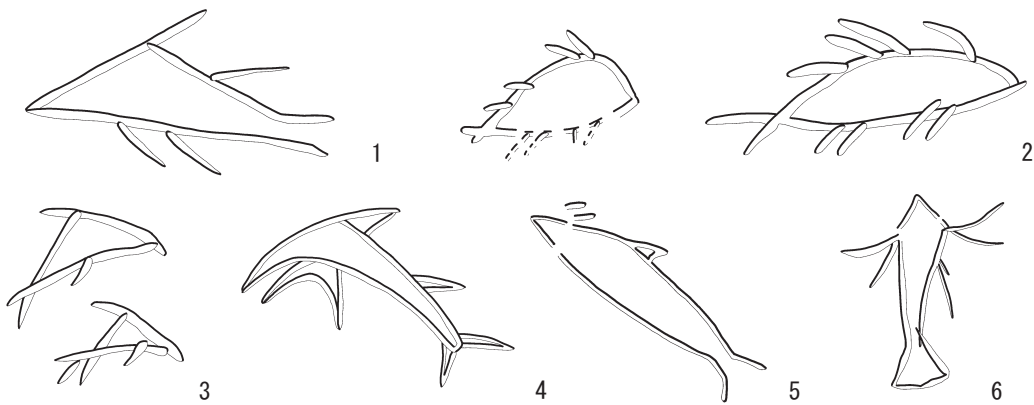
② 人物の状況を示す表現（ポーズ、妊娠表現、子供を抱く表現など）

③ 身体装飾（刺青、結髪、装身具など）

④ 文様（刺突充填、隆帯、沈線文、中軸線などのうち土偶固有のもの）

⑤ 文様（土器と共通するもの）

しかしながら、清水土偶の構図は前面・背面とも①～⑤のいずれにも当てはまらず、管見の限り、描かれる位置、構図の見た目など縄文晩期末～弥生前期の東海地方には直接比較できる資料がない。よって、線刻画とは考えるが、本来の構図やモチーフなどから原形を留めないほど大幅に変容した可能性も考慮しつつ、関連しそうな資料との比較を行っていきたい。



第3図 弥生土器絵画における魚の構図パターン（縮尺不同）

5. 線刻画（前面）の検討

魚をモチーフとする線刻表現として、真っ先に思い浮かぶのは、弥生時代中期以降に西日本各地で広くみられる土器や銅鐸の絵画である。しかし、その構図や描き方には、むしろ清水土偶との相違点が目立つ（第3図）。

外形の構図パターンは、三角形（1・3）、杏仁形（2・5）、下開きの三日月形（4）、上から俯瞰したもの（6）の4種がある。6を除いて背ビレは単数または複数描くものがあり、腹ビレを描くものも多いが、体部の内側に胸ビレなどの構図を描くものはない。尾ビレの描き方は主に2種あり、体部末端の線を交差させて表現するか（2・3）、体部末端の線を交差させず外側に開いて表現する（1・5）。頭部や尾ビレが体部から独立して描かれるものは少ないようで、さらに外枠線の内部に短線を充填する例になると全く見当たらない。

そもそも、第3図に掲げたような絵画土器の盛行期は畿内第Ⅳ様式期が中心で、清水遺跡の出土土器とは時間的な接点をもたない。東海地方においても同様で、鹿などを描く西日本的な絵画資料は朝日遺跡などにみられるが、清水土偶よりも後の時期と言わざるをえない。

では、モチーフが異なる線刻画であっても、時空間的に近接し、関連しそうな資料はないだろうか。

縄文時代晩期後半の突帯文土器には線刻の施された土器群があり、東海地方では豊川下流域に分布の集中がみられる（第4図1～6）⁵⁾。

これらは絵画土器として扱われ、一部の構図（2・6など）は小林青樹氏の分析により、大洞式に由来する文様が変形したものと判明している（小林2002）。

3が植物を描いたようにみえる他はモチーフが不明で⁶⁾、きわめて抽象的な構図が大半を占めるが、外枠を描いた後、内部に多重沈線を充填するものも一定量みられ、清水土偶前面の構図に共通する描出手法といえる。

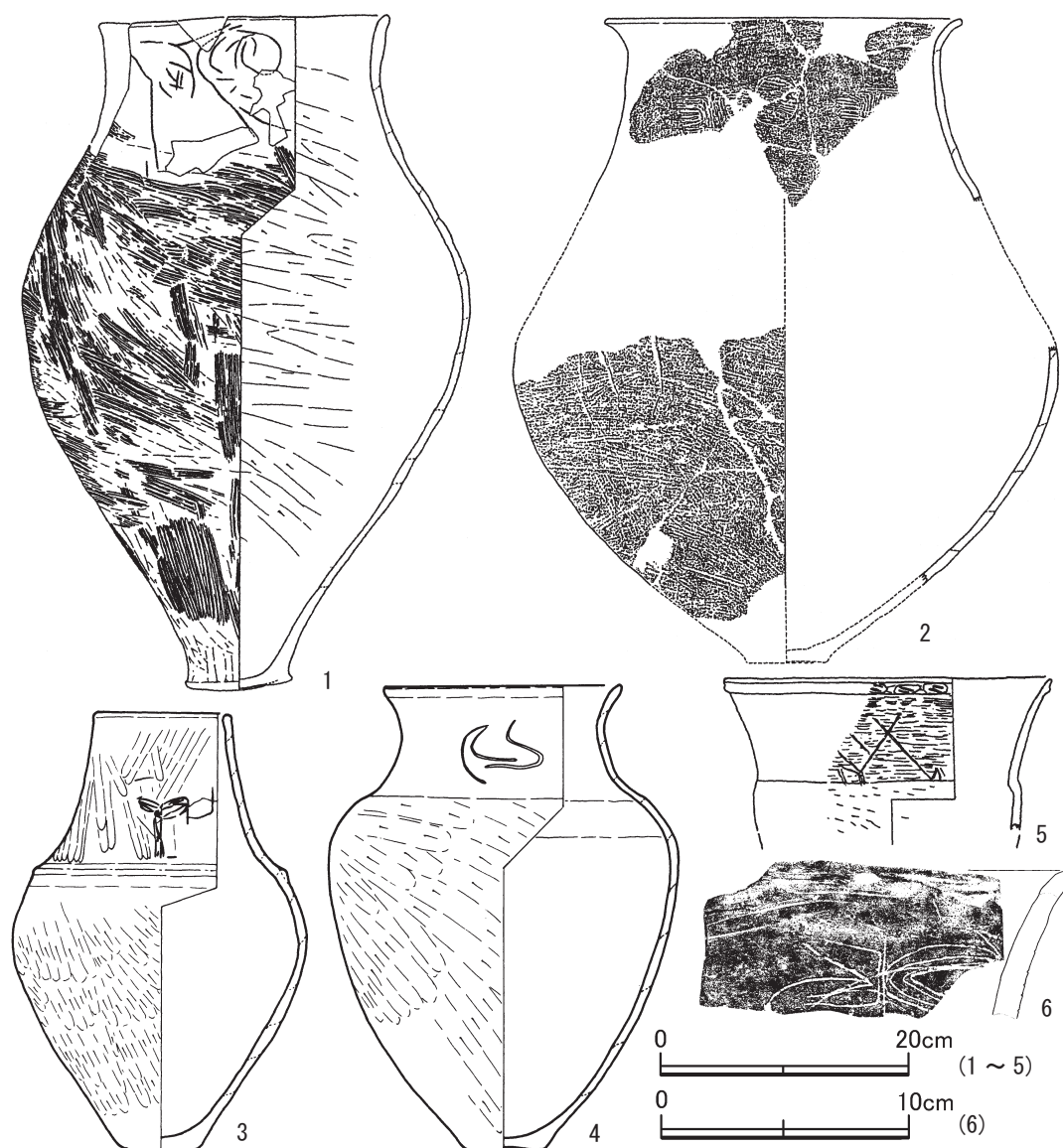
これらの絵画土器は、土器棺として用いられる例が大半を占め、小林氏が麻生田大橋遺跡における絵画土器の分布状況を検討し、埋葬行為に一定の役割を果たした可能性を述べたように（小林2002）、葬送儀礼への関与を強く窺わせる。

これらの絵画土器とほぼ同時期に、東海地方の土偶には性質上の変化が生じており、男女一対の土偶が出現するほか、副葬品としての性格をもつものが現れ（設楽1994、1996）、遺構内での共伴例はないものの、絵画土器と土偶の両者は同一墓域内で接点をもつ。

清水土偶前面の線刻画は、土偶が副葬品として葬送儀礼に関与していく過程で、遺骸収容器として葬送儀礼に関与する絵画土器から転写されたものと理解しておきたい。

また、名古屋市古沢町遺跡の土偶は顔面に抽象的な線刻画がみられ（第7図3）、位置や構図は異なるが、線刻画をもつ土偶が清水土偶1例に留まらず、一定の範囲で分布圏を形成した可能性を示唆する⁷⁾。

構図としては類例を欠くため、清水土偶の線刻画が何をモチーフとするのかは保留するとしても、当該期の東海地方では土偶の副葬開始を契機として、線刻画の対象が土器から土偶に拡大、あるいは移行したと考えられる。



第4図 三河地域・突帯文土器の線刻画

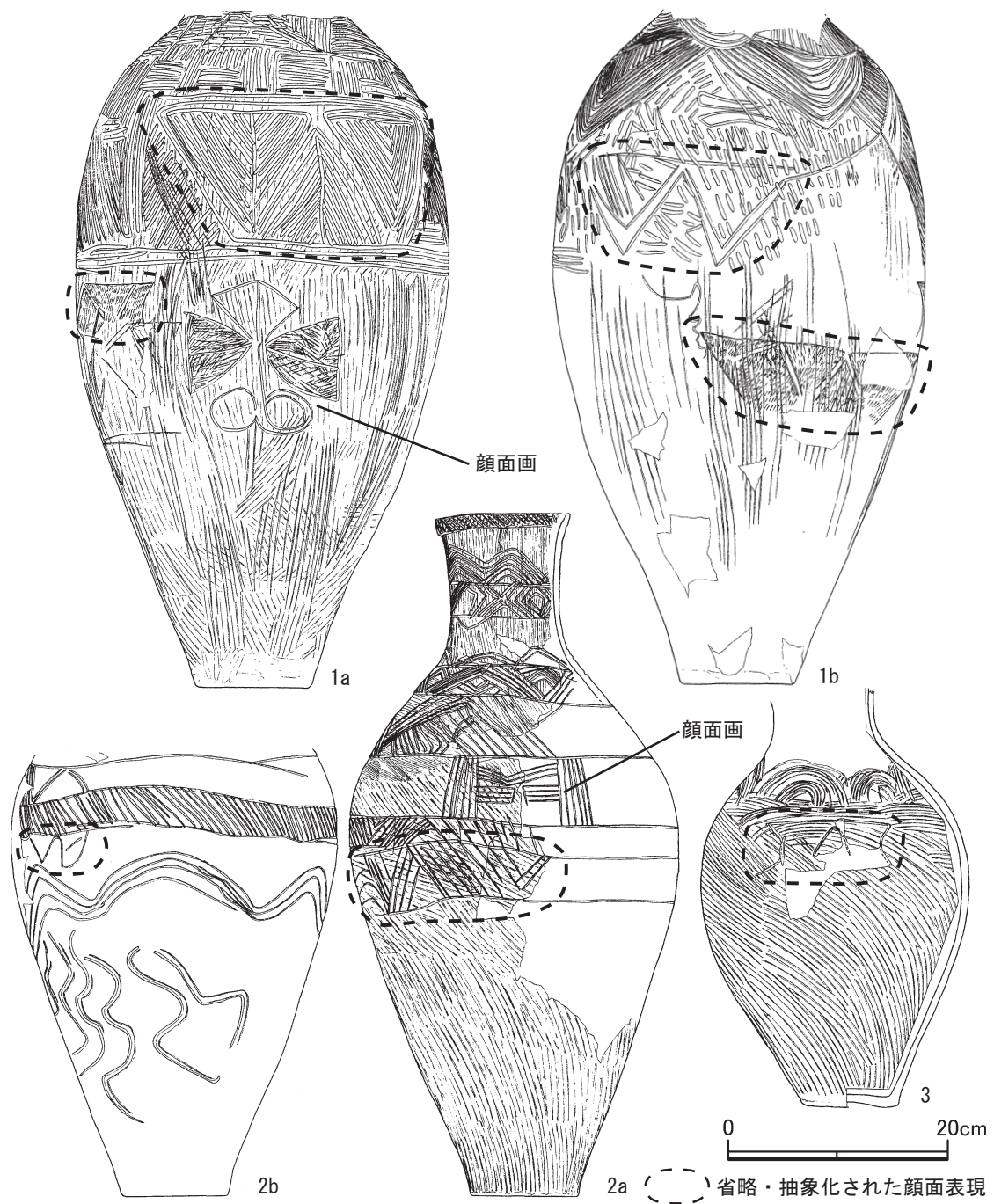
6. 線刻画（背面）の検討

さて、背面の構図はどのように捉えればよいか。突飛かもしれないが、筆者は土偶や土偶型容器、顔面付土器の顔面にみられる黥面表現が著しく省略化・変形したものだと考えている。両者に共通する要素としては枠線内に短線を充填する手法、左右に描かれた耳に相当する構図が挙げられるほか、東海西部の一部の黥面と共通するものとして顔面全体を十字分割する手法が考えられる⁸⁾。しかし当然ながら、背面の構図は一見しても顔面には見えないため、いくつかの関連・類似資料を経由して理解する必要がある。

土偶型容器・顔面付土器の分布範囲のうち、関東～

東北地方南部では弥生時代中期前半に「顔面画土器」がみられる（第5図、石川 2008）。本来、顔面付土器とは祖形となる土偶型容器と同様に、口縁部に顔面を作出するものであるが、顔面画土器では胴部中位に顔面が配置されて原則からの逸脱が生じ、さらに顔面は立体表現を喪失して平面表現のみで作出される。なかには2aのように一見しても顔面とは判別できないほど省略が進行したものがあり、さらには図中の破線枠内のように、もはや原形をとどめないレベルで顔面を省略・抽象化したとみられるW字形の構図が配置される。

さて、同様の資料は北海道など遠隔地でも指摘され（設楽 2003）、同一ではないが類似した現象は東海地



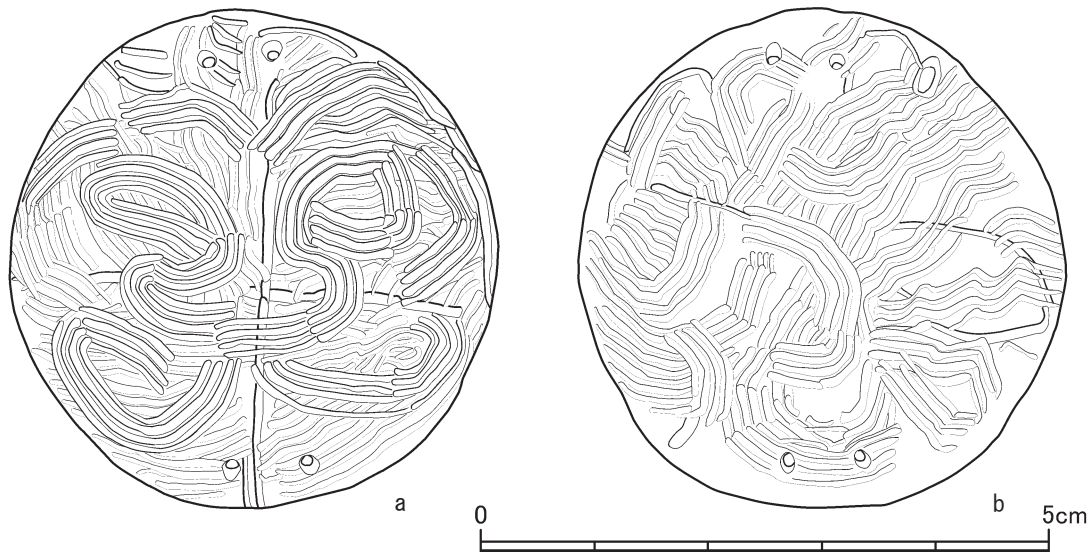
第5図 弥生時代中期の顔面画土器

方でも確認できる。

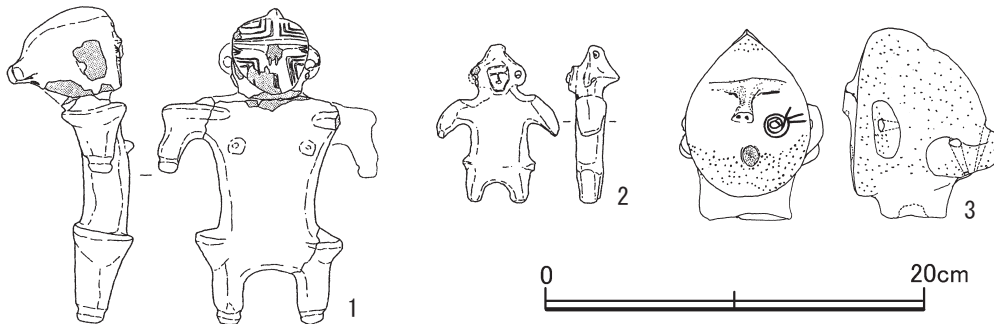
清須市・名古屋市朝日遺跡の貝殻山貝塚地点では、顔面表現もつ盤状土製品が出土している（第6図）。上下両端に穿孔があり、蓋形土器であろう⁹⁾。a面は十字状に沈線を下描きして器面を分割した後、4本1組の連体で下地を描き、その上から同じ連体で顔面を描いた後、額の空白部に沈線を引く。b面は杏仁形？の沈線構図を描いた後に、a面と同一の連体で振幅の

短い波線、あるいは弧線を多数重ねる。

a面は下地・顔面ともに同一工具を用い、構図も簡略化されているため、一見では顔面表現であるのか判断しづらい。さらに、平面表現のみで顔面を作出する点、顔面が独立したパーツ（蓋）として壺の口縁部から切り離される点は、顔面画土器にみられる原則からの逸脱と通じるものがある。b面の波線も、類似する線刻が顔面画土器にあり、「ウェイブする長い髪を後



第6図 朝日遺跡・顔面表現ある蓋形土器



第7図 東海地方の関連土偶

頭部で結び垂らしたよう」と毛髪表現の一種とする見解がある（石川 2008）。

このように、第6図の蓋からは、顔面表現の平面化と省略・簡略化傾向、顔面位置の非固定化という二つの現象が、東海地方でも生じていると読み取れる。同時期の資料と断定できない点は気にかかるが、これらの現象が顔面付土器にとどまらず土偶にも及ぶことで、清水土偶の背中に著しく簡略化・抽象化された顔面が配置されるものと理解したい。

おわりに

本稿では、清水遺跡出土の土偶を再資料化するとともに、前・背面の線刻画について若干の考察を試みた。いずれも縄文時代晩期末葉から弥生時代中期前半にかけて起こる、土偶・土偶型容器の変質・変容と関連する事象であると理解できよう。わずかな資料からの網渡り的な考察ではあるが、今後も同様の視点で点

検を行い、資料の蓄積を目指したい。

本稿作成及び資料調査にあたっては、黒沢浩先生及び南山大学人類学博物館から格別のご配慮を賜りました。また、下記の諸氏・諸機関には資料の実見にご協力いただき、多大なご教示を賜りました。末筆ですが厚く御礼申し上げます。

池尻篤、石川日出志、石黒立人、磯谷和明、鬼塚知典、河合伸一、忽那敬三、設楽博巳、杉山孝徳、田中和之、寺前直人、轟直行、永井宏幸、原田幹、宮川博司、愛知県埋蔵文化財センター、清洲貝殻山貝塚資料館、明治大学博物館（五十音順・敬称略）

註

- 1) 土偶の帰属時期については後節で述べるが、前田 1993 でも同様の所見が示されており、縄文時代晩期末葉以降の板状土偶の製作技法としては、三河湾周辺域において通有なものといえるようだ。

- 2) 本稿では、型式名・段階設定については石黒・宮腰 2007 に従う。5 の口縁部形態は、「岩滑式 3 期」に出現する「碗状口縁壺」に該当する。また、6・8 の文様帯構成は水神平式新段階（石黒 1992）から分離された「岩滑式 1 期」に相当する可能性が高いが、破片であり両者のいずれかとしておく。
- 3) なお、突帯文土器の第 2 図 1 は、短く直立気味の口頸部、最大径が肩部の稜に位置する器形からみて、いわゆる西之山式期から五貫森式期の古い段階に相当する時期と考えられるが、丈が低く頂部が鋭い稜をなす断面三角形の突帯、細い篋状工具による間隔の空いた刻目などの特徴は在地の手法ではない。伊勢湾周辺域でなく、より西方の所産とみるべきだろう。
- 4) 麻生田大橋遺跡 SK125 の出土土器は最終末段階の突帯文土器が主体だが、樗王式と考えられる深鉢の破片も出土し、前田氏と設楽博己氏は樗王式期の墓坑と判断している（前田 1993、設楽 1996）。
- 5) なお、弥生時代前期になると、条痕文系土器にこのような絵画土器は全くみられない。突帯文土器とは異なり、無文部を設けない施文・調整上の特徴も影響したのであろうが、きわめて短期間のうちに消滅に至ったことになる。
- 6) 3 には顔面表現である可能性を指摘する意見もある（大阪府立弥生文化博物館 2005）。
- 7) 表面採集資料だが、形態や同遺跡の発掘調査資料からみて樗王式期前後と判断してよいだろう。
- 8) 例数は少ないが、第 6 図 a 面や第 7 図 1 にみられる。
- 9) 施文原体の幅が貝田町式よりも太く、結束が甘く条間が不揃いな点から、弥生時代中期の朝日式期に属するだろう。なお、この蓋に対応する口径の壺は見つかっていない。

挿図出典

第 1 図：筆者作成、第 2 図：金森 1992（5 拓影のみ筆者作成）、第 3 図：1. 田原本町教委 2009、2. 大阪府文化財センター 2007、5. 橋本 1994、3~4. 山田 2006、6. 田原本町教委 2006（すべて筆者再トレース）、第 4 図：1~2. 豊川市教委 1993、3~4. 愛知県埋蔵文化財センター 1991、5. 小林 2002、6. 筆者作成、第 5 図：1. 石川 2004、2~3. 石川 2006、第 6 図：筆者撮影写真をトレース、第 7 図：1~2. 豊川市教委 1993、3. 名古屋市教委 1971

参考・引用文献

愛知県教育委員会

- 1972 『貝殻山貝塚調査報告』
（財）愛知県埋蔵文化財センター
1991 『麻生田大橋遺跡』
会津美里町教育委員会

- 2007 『油田遺跡 第 2 分冊 縄文・弥生時代編』
安藤義弘・松原隆治・伊藤秋男
2007 「中山英司と愛知の遺跡」『伊藤秋男先生古希記念
考古学論文集』
石川日出志
2004 「茨城県北原遺跡再発掘の研究」『明治大学人文科
学研究所紀要』第 54 冊
2008 「関東・東北における弥生時代中期の顔面画土器」
『駿台史学』第 133 号
石黒立人
1992 「V 考察 [条痕文系土器]」『山中遺跡』（財）愛知
県埋蔵文化財センター
石黒立人・宮腰健司
2007 「伊勢湾周辺地域における弥生土器編年の概要と課
題」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』
大阪府文化財センター
2007 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ』
大阪府立弥生文化博物館
2005 『東海の弥生フロンティア』
金森昭憲
1992 『清水遺跡—発掘資料報告—』南山大学人類学博物
館
考古学フォーラム出版部
1995 『縄文/弥生 変換期の考古学 第 1 回東海考古学
フォーラム 豊橋大会の記録』
紅村弘
1959 「清水包含地」『東海の先史遺跡 —三河編—』名
古屋鉄道
1984 「清水包含地」『東海の先史遺跡 綜括編』
小林青樹
2002 「突帯文土器の絵画」『国立歴史民俗博物館研究報
告』第 97 集
設楽博己
1994 「農耕文化が土偶を変えた」『歴博』67
1996 「副葬された土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』
第 68 集
1998 「黥面の系譜」『長野県小諸市 氷遺跡発掘調査資
料図譜 第三冊—縄文時代晩期終末期の土器群の研究
—』
2003 「続縄文文化と弥生文化の相互交流」『国立歴史民
俗博物館研究報告』第 108 集
田原本町教育委員会
2006 『田原本の遺跡 4 弥生の絵画』
2009 『唐古・鍵遺跡 I』
（財）栃木県文化振興事業団
1999 『清六Ⅲ遺跡 I（縄文・弥生・古墳時代編）』
豊川市教育委員会
1993 『麻生田大橋遺跡』
名古屋市教育委員会
1971 『古沢町遺跡発掘調査報告書 I 縄文時代編』

橋本裕行

1994 「弥生絵画に内在する象徴性について」『原始の造
形 縄文・弥生・古墳時代の美術』講談社

前田清彦

1988 「縄文晩期終末期における土偶の変容」『三河考古』

創刊号、三河考古刊行会

1993 「第IV章 遺物 第II節 2期の遺物 3. 土製品」
『麻生田大橋遺跡発掘調査報告書』豊川市教育委員会

山田康弘

2006 「山陰地方の弥生絵画」『原始絵画の研究 論考編』

(越谷市教育委員会)

Line Drawing Carved on Earthen Figure with a Spatulate Tool

UEKI Masahiro

This paper makes a report on the characteristics, date and the pedigree of an earthen figure excavated from the Shimizu remains, Aichi Prefecture, by re-making a measured drawing based on observation. This material has basic characteristics common to other conventional earthen figures distributed widely in Tokai area after the end of Jomon period, otherwise it has a unique expression before and behind the figure which is thought to be a line drawing with a spatulate tool. I investigated if the drawing represented any motif, and what was the background to the adoption of drawing to the figure. Accordingly, although the meaning of the drawing still remains uncertain, it is supposed that drawing on jar-coffin, used in the earlier period, was transferred to the earthen figure, in consequence of the change of situation that earthen figures began to be buried within tombs. It is also supposed that the line drawing on the back of the figure would be a simplified pattern of human face which is thought to be derived from earthen figure or pottery with human facial representations. Both line drawings seem to be related to the change of characteristics among earthen figures at the end of Jomon period.

2016年3月15日 印刷

2016年3月18日 発行

南山大学人類学博物館紀要 第34号

編集・発行人 南山大学人類学博物館

466-8673 名古屋市昭和区山里町18

Phone 052(832)3147 (直通)

印刷 株式会社クイックス

456-0004 名古屋市熱田区桜田町19-20

Phone 052(871)9190